

## 丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

### 第三研究歴史班

慶応四年正月五日、鳥羽伏見の戦の翌々日西園寺公望は丹波・山陰方面鎮撫のために薩・長の兵三百余名を率い明智坂越より馬路村に入った。彼は鎮撫総督就任の日すでに口丹波の村々に檄を飛ばして幕軍討伐のために厥起を要請している。これに応えて叫合されたのが周知の丹波弓箭組であった。

馬路村の人見立之進・中川禄左衛門以下七十余名の人見・中川の両苗郷士はその中核となつて鎮撫に郷村治安対策に奔走した。両苗郷士は中世以来馬路郷における地侍として郷村支配を行つていたと考えられ、秀吉の檢地後は身分的には本百姓に零落しながらなおいくたの特権を保持して郷村を掌握した。幕府代官の支配時代に入つても古来の在郷名族としての身分的優位を誇り、つづいて元禄十一年旗本杉浦氏の領知後も由緒連綿の家たる伝統的權威と他に隔絶せる強大な経済的基盤に立つて村支配を独占した。彼らうちには帯刀仲間なる郷士集団を結成し同姓の結束と統制をはかり、外には古来口丹波一帯の村々を超えて先祖の勲功と旧家連綿の家たる自覺のもとに会合団結した同者連中に加算して、村支配にお

ける独占的優越性の維持につとめた。

これに対して馬路の草分を以て自任しながら従来両苗の下風に立たされてきた小番組百姓はしだいに伸張してきた経済力を足がかりに明和・安永期には固定化する身分階層の転換を企図するにいたつた。彼らは河原一族をもつて構成され、村高一五二〇石余のうち一八七石余を小番組として支配し、両苗支配の両番高一三三三石余と二分して村支配の一翼を担つた。小番組は庄屋以下の村役を備える行政組織を有し、村内さらに村が存するような行政上異例の重層的構造をもつていたのである。

つぎにこの村の最下層として八十三人組（中間組とも呼ばれる）を中核とする零細農ないし無高の一団である水呑小者があつた。彼らには両苗の家頼ないしは家頼筋と呼ばれる従層農民とみなされるものを包含していた。長年にわたつてこの階層に加えられた抑圧は化政期になると彼らによつて手強くなかえされ、旧来の従属關係からの開放、経済的自立化への前進が企てられ、彼らの桎梏となつていた身分的規制はつぎつぎと無視されようとする。

ここにあげた史料はいずれもこの村の身分關係をうかがうに足る。さきに本紀要第三号に収録された井ヶ田良治氏による「丹波国南桑田郡保津村五苗文書」によつて示された保津村における五苗による村支配の構造は馬路村のそれと若干の差異がありながら共通の性格をもつものである。併せみられ

んことを願ひする。

これらの史料はすべて馬路町自治会・同町人見惣一・人見芳夫・中川主一郎各氏の所蔵文書であつて、閲覧使用を許された御好意に深く感謝する次第である。特に人見惣一家文書は立命館大学経済学部岡本幸雄氏を通じて借覧の便宜を与えられた。同氏の御配慮に対して深謝の意を表したい。

一

(人見惣一氏所蔵)

郷土中示合之事

一 延享年中從 御地頭様被仰出ゝ趣、是迄者心得違茂有之由得共、向後ハ急度相慎、村方騒動ケ間敷儀有之由共、郷土之内ハ萬事不相拘靜謐ニ候様可申合ゝ事、

一 御知行所御用等有之由節ハ、年番之者可為出勤ゝ事、

一 此度始而江戸表出勤之儀被仰出忝一統承知仕、然ル上者年々交代相勤可申ゝ事、

一 惣代年番者有心得人順番ニ可相勤ゝ事、

一 致帯刀候ニ付奢かましき儀無之様ニ心得、随分儉約第一ニいたし農業無懈怠相勤可申候事、

一 郷土不相應之格別賤キ馬奴、或辻賣、或桶屋、畳屋・左官・大工・紺屋之類ハ堅致間敷ゝ事、

一 寄合衆者中老之内ニ而、村役人を除キ筆算等之修練茂有之実底之人七人、地方功者兩人、坊人老人宛撰之、年高順番ニ而可相勤事、

一 諸評儀者寄會衆相談之上、六老衆にも申達取計ひ可有、若右人数ニ而難相濟儀者、其餘五七人茂相招評儀決定可有、

一 御印物并古証等者寄會衆之内年番預り、但鍵者兩メニして両家大老之預り可為ゝ事、

一 勘定之義者寄會衆立會ニ而いたし、其趣六老衆に茂申達し可申、賄方ハ年番ニ而可相勤ゝ事、

右之条ニ急度相守可申、依而連印如左、

宝曆十三<sup>(曆)</sup>癸未年十月

人見利兵衛

人見彦右衛門

中川彦八

人見怡碩

人見平太

人見孫八

中川祿左衛門

人見右京

人見養悅

人見貞右衛門

人見小三郎

中川元徳

人見治部助

中川作兵衛

中川三左衛門

中川与市

人見東仙

中川玄隆

人見政助

中川与三兵衛

人見玄栄

中川源七

中川辨秀

中川儀左衛門

中川林

人見浅右衛門

人見宇右衛門

人見伊兵衛

人見伊八

中川小藤太

中川昌徳

人見源右衛門

中川箕助

中川平右衛門

中川忠藏

人見松元

人見五平次

人見重三郎

人見利左衛門

人見平吉

人見辨之助

連判人数如右

寄會衆之定

中川祿左衛門

中川与市

中川与三兵衛

人見政助

中川辨秀

中川儀左衛門

中川平太

地方功者 人見孫平太

坊人 人見怡碩

二

(人見惣一氏所藏)

乍恐口上書

此度御用金被仰付、甚以難儀之段御願申上<sub>レ</sub>得共、嚴重ニ被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>ニ付村方一統無據御請申上<sub>レ</sub>、然<sub>ル</sub>處郷土之者共迎茂此度、御大切之御時節柄<sub>レ</sub>間、別段ニ出情仕<sub>レ</sub>而差上<sub>レ</sub>様被仰渡<sub>レ</sub>得共、困窮之者共甚以難渋仕<sub>レ</sub>段御歎キ申上<sub>レ</sub>得共、何分郷土之規模相立不申<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>相濟不申<sub>レ</sub>間、如何様共致勘弁調達可仕旨教度無據趣被仰渡<sub>レ</sub>得共、何を以調達可仕手立無御座甚恐入罷在<sub>レ</sub>内、日教相延不埒之段、御呵被成下、右ニ付乍少分金貳拾両者工面可仕<sub>レ</sub>得共、段々手を詰<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>之儀此金之處ハ出来不仕<sub>レ</sub>段再應御断申上<sub>レ</sub>得共、是以御聞届

無御座又ニ被召出、五拾両者是非共御用達可申旨敷敷被仰渡故、乍難儀五拾両都合御請申上御濟メ被下<sub>レ</sub>處、又ニ旧冬押詰<sub>レ</sub>而被召出、今五拾両相増<sub>レ</sub>様被仰聞、甚以當惑仕<sub>レ</sub>、前段申上<sub>レ</sub>通難儀之働仕<sub>レ</sub>處、何分出方無御座<sub>レ</sub>ニ付、此段御断申上、最初御請仕<sub>レ</sub>金高五拾両漸大晦日迄ニ相納メ申<sub>レ</sub>仕合ニ御座<sub>レ</sub>、然<sub>レ</sub>ル<sub>レ</sub>此度又ニ被召出被仰渡<sub>レ</sub>御儀甚奉驚<sub>レ</sub>、敢早此と衛斗無御座<sub>レ</sub>間、御慈悲之上幾重ニも御捨免被成下<sub>レ</sub>様奉願上<sub>レ</sub>、以上、

明和三戊年正月

- 中川儀左衛門 印
  - 人見 清治 印
  - 中川 玄隆 印
  - 中川与三兵衛 印
  - 中川 林 印
  - 中川小藤太 印
- 御役人中様

尋書

一いつれも帯刀相願<sub>レ</sub>儀、如何相心得相願<sub>レ</sub>哉、

此儀

一帯刀、いたし<sub>レ</sub>訳如何之儀ニ<sub>レ</sub>哉、

此儀

一いつれも帯刀之ものハ、銘ニ不相願可致帯刀訳ニ而致帯刀

間、御地頭之儀者相背<sub>レ</sub>而も不苦儀と相心得<sub>レ</sub>哉、

此儀

一相願致帯刀在<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>得共、御上之御難儀を存面ニ相願、此度御用成丈ケ致出情、從 御上不被 仰付儀を此方ニ相願御用相勤<sub>レ</sub>跡ハ帯刀相願<sub>レ</sub>訳合も相定<sub>レ</sub>間、自分共表向ニ而急度申渡筋も無之、完治相心得貳百両者致調達可然旨申訳<sub>レ</sub>、依之員数ハ不申達<sub>レ</sub>間、帯刀之ものハ何ほと出金仕度段申罷出<sub>レ</sub>儀被取申計<sub>レ</sub>ハ、帯刀之者共分合も相立、格別之勤ニも可被成<sub>レ</sub>間為心得申談<sub>レ</sub>儀ハ如何相心得<sub>レ</sub>哉、

此儀

一前段之儀ニ付完治委細申聞、郷士帯刀之もの共ニ相願<sub>レ</sub>而も此度之儀出情<sub>(釋)</sub>も<sub>レ</sub>ハ、帯刀致<sub>レ</sub>訳も相立<sub>レ</sub>間、其趣を以取計可被申渡旨完治へ申訳<sub>レ</sub>處、左様之趣完治不申聞、一通リ一同御用金之被仰付<sub>レ</sub>間、貳百両調達いたし<sub>レ</sub>様申渡シ<sub>レ</sub>由、右郷士之訳合相立<sub>レ</sub>様自分共心得ニ而申<sub>レ</sub>儀を弥不申訳相違無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>哉、如何由答承被度<sub>レ</sub>、

此儀

一右五ヶ条之趣、林・清治・与三兵衛・玄隆・小藤太・儀左衛門に致答書差出し<sub>レ</sub>様申渡シ<sub>レ</sub>處、残り之もの共存寄も承<sub>レ</sub>ハ、ねハ答わ難致旨申聞<sub>レ</sub>、右ニ付右六人之もの共之存<sub>レ</sub>答書いたし<sub>レ</sub>様申渡シ<sub>レ</sub>處、一向答之儀不調法之者故相分<sub>レ</sub>様答も難致、御面相願<sub>レ</sub>、右分ハ何茂此度之御用是非<sub>レ</sub>相勤間敷<sub>レ</sub>故左様申儀ニ<sub>レ</sub>哉、面ニ身分之儀一向相

分り御答もいたし難キ段不得其意ハ、右御用相動間敷存寄ニ而申儀ニハ、此儀答可申聞ハ、

右六ヶ条之趣一ニ答可申聞ハ、

御尋ニ付口上書

一別紙六ヶ条之趣、御答難仕段申上在処ハ罷帰申上ハ、右六ヶ条之趣面ニ身分之儀不調法もの故答難申聞段相願ハ事ニハ、此上無御心元思召ハハ、萬一罷帰リハ而申訳ハ、郷士仲間貧窮之者共在之と右相願、帯刀相止メ申度申出ハ而者騒動ニ罷成ハ、右様之騒動を為催此度ニ不限、御用之障ニ致ハ様六人之もの共可取計心底ニ而者無御座ハ、左ハハ、其段書付印形仕差上ケハ様被仰渡奉承知ハ、私共毛頭村方騒動為致ハ存甚無御座ハ、依之書付奉差上ハ、以上、

明和三戌年正月廿八日

中川儀左衛門 印  
人見清治 印  
中川与三兵衛 印  
中川 林 印  
中川小藤太 印

林善蔵様

一此度帯刀仲間御用金之儀ニ付、私共六人上京仕ハ、書付を

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

以申上ハ、否難有分リニ付御尋書被仰付ハ得共、早速否不申上ハ故善蔵様明日御出立御引、私共之内江戸表へ可被召連之旨被仰渡、此儀是以恐入難波仕ハ付、御手前様方御預リ被下、上而帰在ハ上否申上ハ上江戸表へ被仰上可被下ハ、依之御連下之儀御用捨被下難有仕合奉存ハ、然ル上ハ随分仲間之者共申談ハ、如何様とも筋立ハ様御答ハ差上可申當其上筋合相分り不申ハハ、其上ハ出府之儀仰渡ハ共、毛頭違背仕聞敷ハ、依一札奉差上ハ、以上、

明和三戌正月

中川 林 印  
中川小藤太 印  
人見清治 印  
中川与三衛門 印  
中川儀三衛門 印  
中川玄隆 印  
広瀬直八郎様  
安同長右衛門様

(表紙)

一明和七寅年より

帯刀仲間申合并  
諸書物写

九人

三

(人見惣一氏所蔵)

申合之事

被下之事ニ有之、

一馬路村人見・中川之内帯刀仕仕者共之儀者、延享元年子人

見團右衛門 御地頭様ニ申立、拾三人之銘、名字帯刀蒙

御免、則拾三人一紙之御免狀頂戴仕、并右 御免許被成

下之趣、御直御判之御墨付團右衛門一名宛之御免狀被下

置之趣、又願ニよつて寛延貳巳年六人之者共同断之、御

免狀被下置之事ニ相成之、然ル所次男株ト申立仕者共、又

願ニよつて貳拾四人之者神事帯刀之御免狀被下置、年始

暑寒之節御家老衆迄御機嫌相同并御役人中御銘、之書中を

以御安否等承之、大地之産物等も差上来之趣、其後御差

圖を以右差上物并呈札も相止ミ、年始暑寒共帯刀仲間惣代

を以、京都御役人衆迄申上、明和三年之頃迄相動来之趣、

右帯刀之銘も段々困窺ニ相成、最早帯刀可仕身元ニも無

之段を申立、帯刀相止度一統御願書差出之御聞濟不被

成下、明和七寅年惣中相對之上ニ而右仲間之内相殘帯刀可

仕者共人数九人相掩、其趣を以段々御歎御願申上之趣御聞

濟被成下、右九人相殘帯刀仕度条、殘三拾三人帯刀相止度

条、右同様共願之通被 仰付、是迄被下置之御免狀不殘差

上、右九人江者御書替之銘、御免狀被下置之、但右之九人

之内人見小七義者、先達而之御免狀次男株神事帯刀之詛を

以、此度非常帯刀之 御免狀被下置之事、

但先年一統帯刀仕仕而、年始暑寒相窺之御者惣中ニ而同

人年番ト相定取計之事、且右年番之者中頃迄四人御扶持

一右先達而之御免狀奉返上之之内、團右衛門に被下之紙御免狀者、此已後も仲間物として相殘シハ様被仰付ニ付不奉返上、時之上席之者預リ居之事、

右之趣ニ付、當時相殘帯刀仕仕九人之者共今般集會之上方端申合ニ付、前条之荒増相認置く也、

帯刀人席順

中川小藤太

中川玄隆

中川儀左衛門

人見佐五郎

中川貞藏

人見團治

人見弁之助

人見与吉

非常帯刀

人見小七

右席順之儀者以後共年輩を以相定可申事、

但當時玄隆義者醫道を以勝手ニ付御窺申上之、席順右之通ニ有之之事、

定

一年始暑寒并臨時恐悅等之儀ハ、其時之上席之者より承合、上京人等相談之上取計可申事、

一寄合等有之砌者、刻限無相違集會可有之ハ、但無拋用事等有之ハハ、先出席之上右之断申立退可申事、

一諸書附等其時之上席之者預リ置可申事、

一寄合宿之儀者帯刀人数順番ニ相勤可申ハ、是又上席ハ順ニ差圖可有之、寄合ニ付入用等者相互ニ懸不申ハ間、随分造作有之間鋪事、

一年始暑寒臨時恐悅、其外御迎等之相定リハ勤方入用仲間持合可申事、其外之儀其品ニ寄入用等取計可申事、

帯刀相止メ度旨奉願ハ願書之写

乍恐奉願口上書

一私共儀以前ハ帯刀蒙 御免許ハ段、冥加至極難有奉存ハ、

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

然ル所近年段々及困窺、當時ニ而者中ニ帯刀可仕身元ニ無御座ハニ付奉恐入ハ得共、已後帯刀相止メハ儀奉願上ハ、勿論相残ハ者共之儀茂同様ニ困窮之義ニ御座ハ得共、此度一統帯刀相止メハ義御願奉申上ハ儀千万歎敷奉存ハニ付、惣中相對之上相残罷在ハ義御座ハ間、右之者共ハ何卒是迄之通帯刀被為 仰付被下ハ様ニ奉願ハ、右之趣御慈悲之上被為 聞召詠願之通被為 仰付被為下ハハ、難有奉存ハ、以上、

明和七年寅六月

人見 孫八

中川 喜八

人見 治部助

中川 禄左衛門

人見 怡碩

中川 元徳

人見 善悦

人見 東仙

中川 作兵衛

人見 八郎右衛門

中川 与市

中川 三左衛門

中川 与三兵衛

人見 浅右衛門

人見 藤九郎

御役人中様

人見 宇右衛門  
 人見 伴水  
 人見 松元  
 中川 定次良  
 中川 平右衛門  
 中川 弁藏

人見 佐五良  
 中川 玄隆  
 人見 与吉  
 人見 團治  
 人見 小七

前書之通一同相談之上、私共同様奉願い、以上、

中川 貞藏  
 人見 弁之助

差上申一札之事

中川 忠藏  
 中川 彦右衛門  
 人見 紋弥  
 人見 重三郎  
 人見 平太  
 人見 利左衛門  
 人見 平吉

一私共儀延享元子年・寛延二巳年・宝曆二申年帯刀蒙 御免い 処、近年段々困窮仕、當時ニ而帯刀可仕身元ニ無御座い 間 奉恐入い 得共、以後帯刀相止い 様奉願い 処、御聞濟被成下 達 御聞、以後帯刀相止い 様被 仰付難有仕合奉存い、依 之先達御渡被成下い 御免許状此度奉返上い、依之一統御請 印一札差上申所、仍如件、

明和七寅年十月

差上申一札之事

人見 五平治  
 人見 庄五郎  
 人見 長兵衛  
 中川 小藤太  
 中川 儀左衛門

一私共儀延享元子年・寛延貳巳年・宝曆貳申年帯刀 御免被



仰付<sub>レ</sub>處、此度外三拾貳人之者共近年段<sub>ニ</sub>困究<sub>レ</sub>仕、當時<sub>ニ</sub>而者帶刀可仕身元<sub>ニ</sub>無之奉恐入候得共、以後帶刀相止<sub>レ</sub>儀奉願、私共儀者相殘帶刀仕度旨一統相談之上連印書付を以奉願<sub>レ</sub>處御聞濟被成下、右三拾貳人之者共儀者願之通以後帶刀相止<sub>レ</sub>様被 仰付、私共儀者是迄之通帶刀可仕旨、猶又蒙 御免許銘<sub>ニ</sub>御免狀頂戴仕冥加至極難有仕合奉存<sub>レ</sub>、依之左之通被 仰渡<sub>レ</sub>事、

一私共儀相殘帶刀被、仰付<sub>レ</sub>儀<sub>ニ</sub>御座<sub>レ</sub>得者、敬御上を何事不寄、御為之儀者勿論村方随分靜謐相治<sub>リ</sub>儀取計仲間申合、平日身持不行跡無之様第一<sub>ニ</sub>相慎、をこり<sub>ケ</sub>間敷儀決而仕間敷<sub>レ</sub>事、

一非常帶刀之者儀者勿論、其外帶刀之者共公事出入願筋等<sub>ニ</sub>而、御奉行所并 御地頭様御役所へ罷出<sub>レ</sub>仰者帶刀仕間敷事、

一村内外百姓共出會之砌御威光を持、かさ<sub>ツ</sub>ケ間敷義決而仕間敷<sub>レ</sub>、尤帶刀之者共當時村役相動罷在<sub>レ</sub>者儀者、格別御地頭様御用向并村用共村役人相談之上取計事濟<sub>レ</sub>儀を不表立、内<sub>ニ</sub>外百姓共何之訳も不存者腰押<sub>レ</sub>たし<sub>レ</sub>為致故障<sub>レ</sub>か、又ハ御法度之強訴徒覚<sub>レ</sub>たし連印等取集<sub>レ</sub>要敷事<sub>ニ</sub>企<sub>レ</sub>者も有之<sub>レ</sub>ハ、仲間申合早速御注進可申上<sub>レ</sub>、御吟味之

丹波国南桑田郡馬路村<sub>ニ</sub>苗文書

上帶刀御取上、其品<sub>ニ</sub>寄重御咎も可被仰付<sub>レ</sub>、惣而 御地頭様御用向村用共其時<sub>ニ</sub>之村役人<sub>レ</sub>取計<sub>レ</sub>ハ相濟<sub>レ</sub>事<sub>ニ</sub>ハ間、差定<sub>レ</sub>願筋向等<sub>ハ</sub>何事によらず村役人之意<sub>ニ</sub>可任<sub>レ</sub>事、

但頭百姓不立會<sub>レ</sub>而難仕用事<sub>ハ</sub>格別之事、一私共内他國者勿論遠方<sub>レ</sub>他行等仕<sub>レ</sub>ハ前後共御届可申上<sub>レ</sub>、尤名前等相改<sub>レ</sub>ハ書付を以相伺御差圖を請可申<sub>レ</sub>、其外縁組等之儀百姓町家<sub>ヲ</sub>取遣<sub>レ</sub>儀者、格別御武家方縁組等仕<sub>レ</sub>儀<sub>ハ</sub>相伺、是又御差圖を請可<sub>レ</sub>事、

一帶刀之儀此度御免許狀被下<sub>レ</sub>九人之外、決而帶刀仕間敷<sub>レ</sub>、且又親隠居仕悴<sub>レ</sub>家督相讓悴帶刀仕<sub>レ</sub>ハ、其砌御届可申上<sub>レ</sub>事、

右被仰渡<sub>レ</sub>趣、逐一承知仕奉畏<sub>レ</sub>、依之一統御請連印一札差上申所、仍如件

明和七寅年十月

人見 團治  
人見 小七  
人見 与吉  
中川 玄隆  
人見 佐五郎  
中川 儀左衛門  
中川 小藤太

人見弁之助  
中川貞藏

四

(人見惣一氏所藏)

人見

一族定

中川

一各随分之作業を相勵、猶又文筆を相嗜行義正直にいたすへ  
き事、

一平百姓も致縁組或者諸講を結集會交親をいたす間敷事、

一都而古規に准し万端紛乱無之様可得相心ひ、不寄何事新儀  
私之筋有之間敷事、

右条に宜相守之殊更養子嫁娶不埒之縁組有之ひ得者子孫迄之  
瑕きんに相成ひ間、急度其由緒を聞糺分限相應之取組をいた  
すへくひ、万一分之縁組有之ひハハ、本人わ勿論其親類并  
媒介人等も姓氏を削平百姓同様たるへくひ条、仍両姓中制書  
如件、

安永四未年五月六日

右大伊勢講出席所ニ張置ひ書付写之、

五

(人見惣一氏所藏)

(端裏)

「享和四六人衆へ差出写」

口上書

一帯刀之儀、万治・寛文後及中絶罷在ひを御地頭所へ由緒  
申立御願御聞濟在之、延享年中帯刀一同御免有之ひ、然  
ルに明和六丑年一同困窮之由申立、身元不相應之儀故帯刀  
相止度段御断御願申ニ付、翌寅年御聞濟一同帯刀相止ひ、然  
ルに家筋ニ而帯刀仕ひ儀も八年申、漸中絶之帯刀を御願申  
上、年間茂無之ニ又ニ相止ひハハ、由緒家名共に後年ニハ相  
罷ひ様ニ茂可相成儀を相歎、一同相談之上為人見・中川郷  
土惣代七八人相残夫が三十四五年相續仕ひ、今度両御六人  
其外御相談之上、中川祖神ニおゐても武運長久子孫安全之  
儀なれハ神前の人見祖神同様ニ相勤可申由、夫ニ付惣代共  
相談仕ひハ、右之家いつれニ而も射的被成ひ御方ハ古来之  
通帯刀ニ而御勤被成ひ様に仕度ひ、一同帯刀御断被願上置  
ひ得ハ、他之義ニハ惣代人ならでハ帯刀難被成ひ得共、神  
前之儀古来之儀式ニ御座ひ間、憚儀ハ在之間敷被存ひ、  
尤先年於御評定所茂神事能之節ハ両苗一同帯刀仕ひ由申上

い、且又為惣代ト年始吉凶共相動罷在い得者、帶刀之儀御断御座い而も惣代名目在之い故、一同帶刀被成い茂同様之御儀御座い、兎角神前之儀古極ニ相返し度被存い、然ル時ハ自然ト銘ミ射術之勵ニ茂相成、又苗跡之外聞方ミ以相談仕申上い、御一同御評儀被成下宜御差圖可被下い、以上、

惣代六人

享和四子二月

阿御六人中様

其外御衆中

## 六

(人見惣一氏所蔵)

(表紙)

「文化元年

阿苗一同定帳

甲子五月 日

廻状

覺

阿苗六人出席之儀無據筋合ニ而、阿頭共遅ク相動い而も年順ニ而六人呼出し在之いニ付、他村ヲ養子之衆中茂自然ト右ニ順シ年順出席ニ而古儀失ひ申いニ付、近年往々右之儀内評茂

丹波國南桑郡田馬路村阿苗文書

有之儀ニ付、此度相談之上左之通相改い事、

一古來之頭順次ニ而六人呼出し在之儀ニ付、當甲子歲冬頭ヨリ堂山口共相動い衆中養子実子共、頭し次第を以六人席に呼出しい事、

但し村養子之儀者里方ニ而相動い頭し順を以呼出し申い、尤姓代りいハ、頭初直し可被申い事、

一當歲春頭迄之衆中ト実子者年順を以六人出席、他村養子之衆中者ニ席後レ相定申い事、

一以來當歲出生之男子并養子入い衆中、其年之山口前ニ衆座付添御供白米壹升、人見衆中ニハ伊右衛門、中川衆中者藤四郎方為持可被遣い事、

一當村ノ諸國に罷出仕官并住居之衆中、家元ノ氣を付阿頭共為相動可申事、六人席之儀者頭之順を以頭帳に相印可申い、呼出し呼返し名代共以來不及其儀い、尤頭相動不被申いへ者頭帳名前無之ニ付、由緒絶切ニ相成い事、右之通相定い間、御承知可被成い、以上、

文化元年甲子五月

人見  
六人  
中川

七

(人見惣一氏所藏)

乍恐奉願口上書

一私共儀郷土筋目之由緒 御聞届被 成下、延享元子年・寛

延二巳年・宝曆二申年帶刀奉蒙 御免<sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>、其後段々及困

窮、帶刀可仕身元ニ無御座<sub>レ</sub>ニ付奉恐入<sub>レ</sub>得共、以後帶刀

相止度段明和七寅年奉願<sub>レ</sub><sub>レ</sub><sub>レ</sub>、願之通御聞届被成下難有奉

存<sub>レ</sub>、然處長々帶刀相止居<sub>レ</sub>ニ付、當時ニ而ハ由緒茂相消

イ姿ニ而、末々之者共と差別無之様ニ成行、村方治リ方ニ

も不宜甚以歎ケ敷奉存<sub>レ</sub>得共、困窮之私共故前々之通帶刀

可仕身元ニ無御座<sub>レ</sub>ニ付、此儀者御願不申上<sub>レ</sub>得共、何卒

以來之処左之通被 仰付被下<sub>レ</sub>様奉願上<sub>レ</sub>、

一神事并近村郷土仲間出會親類内吉凶等之節、帶刀 御免被

成下<sub>レ</sub>様奉願上<sub>レ</sub>、

一前、者次男株之者共者、神事等之節帶刀御免被 成下<sub>レ</sub>得

共、以來者一統同様被 仰付被下<sub>レ</sub>様奉願<sub>レ</sub>、

一此以後次男等別家為仕<sub>レ</sub>儀御座<sub>レ</sub>ハ、御願可申上<sub>レ</sub>間、

其節者一同同様ニ被 仰付被下<sub>レ</sub>様奉願<sub>レ</sub>、

右之通 御聞届被 成下 御免許状被 下置<sub>レ</sub>様奉願上<sub>レ</sub>、  
左<sub>レ</sub>得者私共由緒之訳相立、自然と村方治り之為ニ可相成と  
奉存<sub>レ</sub>間、右之趣被為 聞召分御憐愍を以願之通被 仰付被  
下<sub>レ</sub>ハ、冥加至極難有仕合奉存<sub>レ</sub>、依之一統連印を以奉願  
上<sub>レ</sub>、以上、

文化四年丁卯八月

馬路村

嶋 右衛門

半 右衛門

祿 右衛門

九 郎右衛門

勘 六

小 右衛門

八 郎右衛門

仲 右衛門

少 進

藤 九郎

寿 永

嘉 右衛門

半 藏

惣 藏

純 同

彦 八

御役人中様

前書願之儀私共同様筋目之ものは御座は付、一同相談之上奉願の間、何卒願之趣 御聞届被 成下は様於私共も奉願い、以上、

前々帯刀御免之者

人見團三郎

人見彦六

中、川文助

中川儀左衛門

中川和左吉

中川貞潜

別段帯刀御免之者

中川儀重郎

人見七郎右衛門

一同を願は付奥書連印いたし團三郎・彦六兩人為惣代、禄左衛門・勘六・惣藏三人上京、儀重郎在京、都合六人八月廿九日御役宅に罷出願書差出い、

苗字席順御尋は付申上は覚

年齢を以席順相定メ申は、

中川嶋右衛門

人見半右衛門

次男株

庵 孫 三 郎 碩  
右 治 近 郎  
三 治 郎  
九 重 郎  
喜 郎  
太 郎 右 衛 門  
利 兵 衛  
甚 八

寿 平  
富 右 衛 門  
新 左 衛 門  
惣 左 衛 門  
郡 蔵  
要 助  
岩 五 郎  
又 五 郎  
平 兵 衛  
純 助  
権 右 衛 門  
治 左 衛 門

丹波國南桑田郡馬路村阿苗文書

中川 祿左衛門  
 中川 九郎右衛門  
 中川 勘六  
 人見 小右衛門  
 人見 八郎右衛門  
 人見 仲右衛門  
 中川 重郎助  
 中川 少進  
 人見 藤九郎  
 人見 寿栄  
 人見 嘉右衛門  
 人見 半藏  
 人見 惣藏  
 中川 純同  
 中川 彦八  
 人見 庵碩  
 人見 孫三郎  
 人見 右近  
 人見 太郎右衛門  
 人見 利兵衛  
 中川 甚八

右之通ニ御座ハ、以上、

馬路村郷士筋目之者

中川 春平  
 中川 富右衛門  
 中川 新左衛門  
 人見 惣左衛門  
 人見 郡藏  
 中川 新二郎  
 中川 要助  
 中川 岩五郎  
 中川 又五郎  
 中川 平兵衛  
 人見 純助  
 中川 権右衛門  
 中川 治左衛門

惣代 祿左衛門

文化四丁卯年八月

惣藏 六

御役人中様

就御尋申上ハ覚

次男株

一馬路村郷士三拾九人、此度神事等之節帯刀之儀奉願ハ

付、右人数之外ニ郷士筋目之者ハ無之ハ哉御尋ニ御座ハ、

文化四卯年九月

此段右人数之外ニ民右衛門と申者御座ハ得とも、此節重  
病ニ而相談も難相成ハ付願書ニ連印不仕ハ、追而御願  
申上ハ、其節ハ私共同様ニ被 仰付被下ハ様仕度奉  
存ハ、且又源藏跡・為七跡・兵右衛門跡御座ハ得共、三  
軒共當時後家名前ニ而未タ相續人無御座ハ付此度連印  
不仕ハ、追而相続人相極之上御願ニ申上ハ間、其節ハ私  
共同様ニ被 仰付被下ハ様仕度奉存ハ、右之外ニ筋目之  
者老人も無御座ハ、

右之通相違無御座ハ、以上、

馬路村郷士筋目之者

惣代 禄 右 衛 門

勘 六

惣 藏

御役人中様

覺

三拾九人名前

右三拾九人郷士筋目之者ニ付、向後神事并 近村郷士仲ケ間出  
會親類内吉凶等之節、帯刀被差免者也、

丹波国南桑田郡馬路村面苗文書

八

(馬路町自治会所藏)

一 札

一去ル安永年中迄ハ少々宛之村高所持仕ハ義、御憐愍を以御  
差免被下罷在処、水呑小もの百姓一同仕地分ク山ニ相成罷  
在ハ場所を野山・肥山ニ可被成下ト申、願ニ事寄セ色ニ工  
ニ事悪事を企ハ而、押而村方へ相願申ハ御、私共儀者御差  
圖ニまかせ相續右人数ニ相加リ不申、右一同ト其御者絶交  
請罷在ハ御事、然處右願事不埒ニ付村高讓請所持仕ハ義、  
御差留ニ相成罷在ハ儀、甚難渋之趣ニ而段々御願申上ハ  
處、御聞濟之上五石迄所持仕ハ之様被仰付難有御請申上ハ  
由、右ニ付私共先年相續罷在ハ儀神妙成義と被 仰下難有  
仕合奉存ハ、

一大吉跡之儀當時断絶仕罷在ハニ付、私共世話仕株おこし仕

いハ、御手當も被成下い趣被仰渡奉畏い、

一難渋之初も御座いハ、無御見捨御手當被成下い旨被仰下難有奉存い、然處元來私共儀者水呑小ものゝ身分ニ御座い間、御高所持仕い共高持百姓とハ決而相唱不申、書付ニも相認メ申間敷い、諸事は迄之通ニ心得、身分之儀忘却不仕、何事によらず我意を不申、御村方之御差圖ニ相隨ひ可申い事、万一子孫ニ至心得違仕いものも御座いハ、如何様ニも御取計ひ可被下い、其時一言之申分無御座い、為後證連印一札奉差上い、以上、

文化五年辰二月

註 後年、日付下ノ署名ノ部分ヲ削除シタ形跡ガアル。

九

(人見惣一氏所蔵)

(表紙)

「郷士中示合書附」

郷士中示合之事

相慎村方騒動ケ間敷儀有之い共、郷士之内者万事ニ不相拘静謐ニい様可申合事、

一御知行所御用等有之節者、年番之者可為出勤事、

一今度始而江戸出勤之儀被 仰出置一同承知仕い、然上者年

々重代相勤可申事、

但し此度者何とも御沙汰無御座い、万一臨時之御沙汰在之いハ、ケ様と申事究置可然事、

一惣代年番者心得有人順番相勤可申事、

一致帯刀いニ付大着ケ間敷儀無之相心得、法外儉約第一ニい

たし農業無懈怠相務可申事、

一郷士不相応ニ格別賤敷馬追并辻賣、或者桶屋・疊屋・左官・大工・紺屋之類堅致間敷事、

一寄合衆者中老之内と村役人を除ク筆算之修練茂在之美跡之人七人、地方功者兩人・坊人老人宛撰之、年々順番ニ相勤可申事、

但し寄合之儀者時之招中老相談可在之事、若難相濟儀者一同評儀之上取計らひ可申事、

一延享年中從 御地頭様被 仰出い趣有之い得共、向後急度



一諸評儀者寄合衆相談之上、六老衆にも相達し取計らひ可  
在(總)之、若右人数ニ而難相濟儀者其  
余五七人も相招キ評儀決(總)  
定可在之事、

一御印物并古證等者寄合衆之内年番預り、鍵者両メリニ  
して、惣代貳人之内箱と鍵と別ニ預り可申事、  
但し是迄銘々取持之御印者格別之事、

一勘定之儀者寄合衆立合ニいたし、其趣六老衆にも申達し可  
申、賄方者年番も相勤可申事、  
右之条々者古來之書付也、此返答相守可申事、

一第一博奕諸勝負堅禁制之事、

一米賣買之はた堅相成不申、是者別而身上減却之基ニ  
間、少し之事ニ而茂堅無用事、

一参会所の之節賭表惣内乙矢之き、有来い通、其外さし内口  
内堅無用事、  
但し勸進の并歩一會之儀者格別之事、

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

一郷士仲間之衆中馬を迫京道へ罷出儀并芝居之荷物送り向  
ひニ罷出儀、堅無用之事、  
但し津出し其外連ひ山之儀者格別之事、

一會立辻賣等堅無用之事、

一大工

一桶屋

一畳屋

一左官

一鍛冶

一紺屋

右之類内職ニ茂仕儀堅相成不申事、

一人之妻女・娘者勿論後家たり共密夫之儀相聞いハ、一同  
評儀之上名跡を劔可申事、  
但し人之妻娘者勿論後家たり共密夫致い者、急度相慎可

申事、

一名前印形無之衆中茂一同申合之儀ニハ考、後々末代同様承知可在之事、

一不限老若打寄り出銭いたし酒給ハ儀堅無用、夜分者手習・算盤之稽古随分可仕事、

但し不限老若打寄出銭酒銭ハ儀者、其席ニより心得可在之事、

誓約文

一明神參麻上下着用之事、

但し明神まいり麻上下着用いたしハ儀可然ハへとも、時之宜キニ可致事、

一郷土中此以後互ニ随分無慮忽様可申合ハ、若心得違ニ而不願一同相談之儀ヲ却而一己之立身利欲心掛ケ申聞敷事、

一両苗中葬送之節、麻上下紋付之衣裳着用之事、

但し両苗葬送之節、麻上下紋付之衣裳着用可然ハ得とも、時之よるしきニ可致事、

一申分之件ニ堅相守可申事、右之趣於相背者、可奉蒙伊勢兩宮・愛宕大権現殊ニ者産砂明神并人見・中川阿祖神之御罰者也、仍而神文如件、

文化六年月 日

中川九郎右衛門

人見仲右衛門

人見 彦 六

人見八郎右衛門

人見半右衛門

中川重郎助

中川嶋右衛門

人見藤九郎

中川 少 進

中川 文 助

一坊人中十徳着用可申事、

但し羽織着用堅無用之事、

一養子嫁取し節、親類書取之六人一臈ハ届ケ可申事、

一養子貰ひ年、山口前ニ衆座付名前年書付、白米一升相添へ人見者傳右衛門、中川者藤四郎ハ差出し可申事、

人見 寿栄  
 中川 権右衛門  
 人見 純助  
 中川 要助  
 中川 清右衛門  
 人見 嘉右衛門  
 中川 富右衛門  
 中川 新左衛門  
 中川 儀十郎  
 中川 禄左衛門  
 人見 半藏  
 中川 新次郎  
 中川 儀左衛門  
 中川 勘六  
 中川 純同  
 中川 又五郎  
 人見 喜七  
 人見 惣藏  
 人見 右近  
 人見 七郎右衛門  
 中川 彦八  
 人見 安順  
 人見 三次郎

當時六人

中川 岩五郎  
 中川 九十郎  
 人見 郡藏  
 人見 民弥  
 中川 和左吉  
 人見 孫三郎  
 人見 惣左衛門  
 中川 貞潜  
 中川 德之進  
 中川 平藏  
 人見 太郎右衛門  
 人見 八次郎  
 人見 團六  
 中川 甚八  
 人見 金八  
 人見 利三郎  
 人見 弥平太  
 中川 昌桂  
 人見 佐五郎  
 中川 右左二  
 中川 重助  
 中川 常元  
 人見 市之丞





資料

奉存い、已来六人同様為致違背間敷い、以上、

直 七 ⑩  
善 助 ⑩

人見 兩名中様  
中川

差上申一札之事

一私手間大工長治郎ト申者、此度不調法仕申訳無御座、地頭様御叱之御上御拜柱ニ彫付置い文字即座ニ削取可申様被仰付奉畏い所、御阿苗中御立會之上削取御事濟被成下難有仕合可奉存い、以上、

大工 定 七 ⑩

文化十三年閏八月

御阿苗中様

差上申口上書

一私共儀先年差上置い書付通心底少茂相違無御座いニ付、此度之一件ニ不相拘旨前以御届ケ申上い所、御満足ニ被思召下難有仕合奉存い、然ル上者先規之通永々御隨身可申い間、此上御憐愍之段一同奉願上い、以上、

御阿苗中様

文化十三年閏八月

弥 八 ⑩  
傳 右 衛 門 ⑩  
喜 代 七 ⑩

千	左	春	又	忠	源	德	善	仙	松	半	庄	庄	治	弥	定		
				兵	兵					兵	九						
介	介	介	市	藏	吉	衛	藏	衛	介	藏	平	衛	良	七	助	市	七
⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩

(人見惣一氏所藏)

(表紙)  
「申渡書寫」

州 丹波國桑田郡馬路村

人 見  
中 川 見

其方共儀代、村方ニ致住居郷土筋目之者ニ付、由緒御聞届有之、延享元年・寛延二巳年・寶曆二申年帶刀被差免ハ処、段々及可致帶刀身元ニ無之間、九人ハ相殘致帶刀、其余者帶刀相止度旨明和七寅年相願ハニ付、願之通御聞届有之ハ処、右帶刀相止ハ者共神事并近村郷土仲ケ間出會、親類内吉凶等之節帶刀 御免被下度段、文化四卯年相願ハ故願之通御聞届 御免許状被下之ハ、然ル處前々連綿致帶刀ハ中川儀左衛門・中川和左兵衛・人見彦七郎・人見團六・中川曾平・中川貞助ハ此度相願ハ者、人見・中川相名乘ハ者ハ不殘郷土筋目ニ而、右六人之者同様之由緒ニ得共、當時者二仲ケ間ニ相成ハニ付寄合等之節、多人數之内若年之者抔者致心得違隔意も有之、自然ト相談取究兼ハ儀も有之ニ付、向後者前々之通一仲ケ間ニ被 仰付、両苗之者一同先規之通帶刀 御免被成下ハ様相願ハニ付、糺之上江戸表ハ相伺ハ処、格別之 思召を以六人之者ハ願之趣意御聞届有之、人見・中川一同ハ 御免許状者通被下之ハ、依之左之通被 仰付ハ事、

一敬 上何事ニ不寄御為之儀者勿論、村方随分静謐ニ相治リ

丹波國南桑田郡馬路村両苗文書

ハ様取計、仲ケ間申合平日身持不行跡無之様專ニ相慎、奢ケ間敷儀決而致間鋪ハ、若不相守者有之ハハ早速可申出ハ、吟味之上帶刀御取上急度御咎メ可被 仰付ハ事、

一席順之儀者是迄之通年齢を以次第相定メ、両苗一統無隔意 陸間鋪可致相續ハ事、

一公事出入願筋等ニ付、御奉行様御地頭御役所ハ罷出ハ御者 帶刀致間敷ハ事、

一村内百姓共出會ハ砌、御威光を以かさつケ間敷儀決而致間敷ハ、尤帶刀之者當時村役相勤罷在ハ儀者、格別御地頭御用向并村用共村役人相談之上取計事済ハ儀を不表立、内々外百姓共何之訳も不存者、腰押いたし故障為致ハ歟、又者御法度之強訴徒黨致し連印等取集惡事を企ハ者も有之ハハ、仲ケ間申合早速可致注進ハ、吟味之上帶刀御取上其品ニ寄重キ御咎も可被 仰付ハ、惣而 御地頭御用向村方共其時々之村役人取計ハ得共相濟事ニ付間、差定ハ願筋用向等者、何事ニ不寄村役人之意ニ可任ハ事、  
但頭百姓不立會ハ而、難叶用事者格別之事、

一其方共之内他國者勿論、遠方ハ他行等致ハハ前後共可相届ハ、尤名前等相改ハハ、書付を以相同差圖を請可申

い、其外縁組等之儀百姓町家を取遣致し儀者、格別武家方縁組等致し儀者是又相伺差圖を請可申事、

一親隠居致し悴に家督相讓、悴致帶刀いハ、其砌相願可申い、其外品替之儀有之いハ、早速可相届事、

一帯刀之儀ニ付、重而勝手ケ間敷願筋致間敷い、乍然次男等致分家い上、帶刀為致度いハ、其節可相願い事、

右之通被 仰付いニ付申度い間奉其意、至後迄無違失堅可相守者也、

文政三庚辰年八月

小島左右衛門 印

青砥軍兵衛 印

小島專藏 印

右之通書付を以致 仰渡逐一承知仕奉畏い、依之一統御請連印差上申處如件、

丹波國桑田郡馬路村

文政三庚辰年八月

中川春平

人見八郎左衛門

人見仲右衛門

中川好治

人見半右衛門

中川崑右衛門

人見喜三兵衛

人見純助

中川権右衛門

中川庄市

中川清左衛門

中川富右衛門

人見伴水

人見利兵衛

中川寿平

人見弥右衛門

中川禄左衛門

中川新治郎

中川儀左衛門

中川勘六

中川純同

中川又五郎

人見喜七

人見惣藏

中川彦八

人見三治郎

中川忠右衛門

人見郡藏

人見小七

中川和左兵衛



人見惣右衛門

人見太郎右衛門

上 人見民右衛門

人見藤九郎

人見彦七郎

人見圖六

人見四郎三郎

中川曾平

中川貞助

人見七郎右衛門

人見加津右衛門

中川又太郎

中川萬藏

中川兵右衛門

御役人中様

帯刀人心得之事

一 帯刀御讀書御ケ條之趣堅ク相守リ、何事ニよらず御制禁之趣急度相守可申事、

一 孝行者第一之儀夫婦・兄弟・朋友之信儀を相守リ、家柄相應之身持可致事、

一 邪法邪欲之儀者衆之憎ハ處、甚敷相成ハ而ハ乱家之基ト、帯刀可被身分第一之心得ニハ間相慎可申事、

一家業者身を治メハ第<sup>(一脱カ)</sup>ニハ間出精可致、其餘カニ者経傳を学、六藝を相嘗ミ可申事、

一 帯刀ニ而他所他國致ハ節、御讀書御ケ條相守リ 殿様御涯分ニ相抱リハ儀決而致間敷、諸向禮儀正敷帯刀致ハ心得之儀相嗜可申、自然法外之義出来ハハ帯刀被召上、其上両苗一同之難淡と相成ハ儀ニ付、帯刀致ハ節ハ諸事格別ニ相慎可申事、

右外両苗為方之儀、又者身分治リ之儀ハ平日相心得可申、不実不行跡致ハハ一同之名跡を相穢シハ事ニハ、申合之條、相背ハ者ハ親類・朋友之者ハ情ニ申聞セ可申、其上不相用不行跡増長致ハハ、一同帯刀家名ニ相抱リハ様ニ成行ハハ六人中之親類中ハ相屈ケ可申ハ、且又両六人村役人帯刀惣代ハ察當申聞ハ上捨置ハハ、親類不行届キ之儀ニ付急度得其意を可申ハ、右様申合セハ義一同睦間敷永久相談致度存念ニ有之ハ故、格別不身持増長之族者、不得止事一同相談之上両苗中示シ之為重ク取計可申事、

文政三辰年八月

## 一一一 (馬路町自治会所蔵)

(表紙)

一文政三年辰九月十八日

中軒一件記

一當夏頃六老衆ヲ若衆中へ被仰聞ハ者、中軒内ノ之子供小番組へ手習ニ遣しハ由、追々相聞ハハ付不宜儀と存ハ間無用ニたし、両苗内カ參會所長林寺ニ而遣し可然哉と被仰、早速ニいて衆中ノ中軒惣代嘉七・喜内へ右之趣追々引分ニ被及ハ也、兩人之者中間へ相談之上返答イたしハ者、三十人計者承知之訳申出、残り四十人計者不承知ヲ申、其上古来ノ兩名へ隨身ノ書附ヲ入置ハ事迄ニ否ミ申隨身ニ而者無之坏ト不法ヲ申、若衆中へ惣代兩人ヲ返答ニ及ハ付、雖捨置六老衆ヲ兩番役人へ指出シニ相成、早速會所へ右二人呼出し相尋ハ也、若衆中へ返答之通相違無之由申ニ付、念之為兩人新類佐七・角兵衛呼出し四人へ申聞ハ者、此度之義容易之事ニ而問敷故得と勘弁致ハ様申付、猶又惣代二人ヲ申ハ也、弥相違無之ハ哉、聞ハ上引取之、

九月十八日夜

一同月十九日暮方右八十人之内老人宇兵衛・半六二人呼出し、前文之通嘉七・喜兵衛ヲ申ハ通相違無之ハ哉相尋ハ

也、宇兵衛申ハ者私共ハ先年之故障ニ甚惑イ入ル故、此度之相談ニ者相かゝわり不申、悴義も寄合等ニ遣し不申ハと申ニ付、然レハ隨身ノ訳ハ如何と尋ハ也、私共ハ御兩名之翼下ニ住ハ者故、隨身ニ相違背之儀ハ無之、併三十人計之のき人の内へも入不申ハと申、半六義も隨身ノ訳ハ同用ニ申ハ得共、悴共カ了簡ハ存不申ハと申ハ付、其方共者中間之年より故、精々納り方勘弁致ハ様申渡し引取ラせハ事、

右ニ付良刻半六悴半兵衛相尋ハ處、私共ハ喜兵衛・嘉七ヲ申上ハ通ニ而隨身ニ而ハ無之と申ハ事、同ク宇兵衛悴榮吉呼出し同様尋ハ也、私共ハ親共ヲ申上ハ通相違無之、隨身ノ者ニハと申ハ事、

一同夜直七呼出し相尋ハ者、其方ハ先年故障之碓濟方之義相願ハ訳も有之故其心得も可有也、此度嘉七・喜兵衛ヲ申出ハ人数ニ加わりハ如何事哉と尋ハ也、直七申ハ者、私ハ年罷より耳も遠く相成、萬事悴へ打任セハ故、悴ノ何之訳も不申聞カサハ故一向存不申ハ得共、今晚承り相分りハと申ニ付、然らハ隨身ノ義ハ如何と申ハ也、先多分ニつきハ様之口上ヲ致ハ付、左様ハ而者其方之為方ニも不宜ハと存ハ故、悴へも篤と申聞セ□□勘弁致ハ様段ニ理解申聞引取申付ハ事、

一廿日ノ夜右人数之内弥兵衛呼出し一件之訳相尋ひ処、私ハ中カ間大功ニ存(切)ひ故、物代ヲ申レ通ニ而レいと申ニ付、段々理解申聞勘弁之返答可申上と申レ事、

一同夜太介・金兵衛呼出し相聞レひ処、兩人共勘弁□上御返答可申上と申レ事、

一廿一日朝三治郎方へ直七罷出レ者、兄半六□中カ間へ中たかへ致レひ様ニ相成レひ故、忤名前引レセレ義得致し不申レ者返答致レ事、

一三

(人見主一郎氏所蔵)

(表紙)  
一 文政四巳二月七日

小ものゝ三ヶ村の差出しレひヶ条書写

并ニ三ヶ村の趣意を下ヶ札ニ被し出レひ写

太郎兵衛留書 一

一天明年中両番免制之内、貳拾九石余両番徳米之印ニ御高ニ割附取上レケレ、其後右ニ付六拾月懸り之講ヲいたし銘々出銀レ得共、何れへ鎮メレ共も相見へず、高懸りハ少しもへり不申、追々懸り多クついに勘定見セも聞しもせずレ、

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

右之儀を三ヶ村庄屋の趣意ヲ下ヶ札ニ致し被出レ趣、此義ハ年久敷相成レ事故取調レ儀も難致、則小百姓が指出しレ帳面ニ而隣人共段々相考レひ得者、全両苗私欲ニ被致レ共不相見、左レ而三番入用割ニ被懸レ共不相見レニ付、此儀者年古ク相成レ勘定帳面故仲人共預りレ而為相濟置レ、其後右ニ付六拾月懸り之講ヲ懸取上レケレ而も高懸り少ク相成不申レ訳も申定有レひ得共、此儀も無拗時ノ振合ニより村方高借ニ相成レひ得者、此訳逆茂利解申聞セひ得共何分前書ニ有レひ両苗徳米帳と申疑言有レひ様ニ相聞へ、追々疑言相重ニ而納りレも相成不申レ得者、此後勘定ニ立會申ニ而無レひ得共、右懸り取立之□番頭ノ右懸り之訳讀聞被致レ而、則番頭より其組ノ少々ニ而茂高有レひもの迄も申聞セひ而、其上取立被致レ様ニ取計可被致レ事、

一私共儀高ヲ五石ニ限り是ニよつて忤三人持レても別家致し、御百姓ふやしレ事ハ相成不申、(貧)びんほう(乞)いたしつづれレの家をおこしレ事ハ相成不申、何分追々家へり多レたなどをき不申レ而者御田地あまりレ、穢多ハふへ私共ハ追々へり、百姓慰も無レひ、

三ヶ村懸帯之趣意、此儀小百姓共高持レ事五石限り御座レひ得共子供人数有レひハ、末々稜分(稜)いたし度ものハ未同居致レ而も拾五才より上ニ相成レ而、御村方御帳面ニ

名前有之い人々は五石ツゝ為持い而者如何、

一昨日御地頭様より御儉約ニハ所、芝居いたし御用之杭炭採  
遣、殊ニ村花も四拾目出し、

三ヶ村を申いハ、此儀ハ過行い事故仲人より精々利解申  
聞セ可申事、

一普請手形私共ハ老升四合宛、あの衆ハ引替ニ出し貳升ほど  
づゝ被取り、是も難渋之上のなんじうニハ、

三ヶ村を申い者、此儀ハ往来三通普請手形之儀引替ん者  
三番之内ニ相限、小百姓人足手形之義ハ是迄通替ニ参い  
事ハ勝手次第、若及暮及暮差出しハ而勝手ニ而も相成い  
ハ、難渋之者故御憐愍ヲ以三番之内同様ニ取計被遣い  
而如何、

一山御年貢之儀私共ハ多ク相掛、両苗ハ少ク相懸り、其上  
両苗六人ニ加りい得者一切差免し、これも難渋之上なんじ  
うニハ、

三ヶ所分申いハ、山年貢之儀者仲人を精々利解申聞い、

一博奕之儀ハ御法度ニハ処、昨年村役人宿被致、何之御文メ  
も無之ハ、従是後若きものども村役人さへ右駄ニハ故嚴重  
申い而も難相止、難渋仕い、

三ヶ村を申いハ、此博奕之儀ハ仲人を精々利解申聞セ  
い、

一昨年傳兵衛稻盜御届申い処、篤と吟味致しハ様本人にも申  
附られ、稻番頭又五郎にも被申付、盗人相知レハ上立會致  
吟味間違無之ハ処、弥八・傳兵衛方へ参村方届ケハ儀相待  
呉い様申いニ付、一日相待い所盗人ハにげいハ逃しハ敷相  
わからずい、傳兵衛八日之違ニ而五人組ニ預られなんじう  
仕い、

三ヶ村を申いハ、傳兵衛稻被盜い事ハ仲人より精々利解  
申聞セい事、

一私共儀ハ墾小屋有者やらなきものやらにて、御年貢物取入  
之時節へいぜいも用心あしくハ付竹簀仕い処、取拂い様  
致申付何も奢ニハ不致只用心而已ニハ所、右様之事ニハ得  
共あらそいもせず取拂い、此段御すいさつ被下い、

三ヶ村を申いハ、小百姓御年貢取入之節メリ無之難渋ヲ  
申いニ付、為用心之勝手ニ竹簀いたし度ハ、堤込柱  
木本称に竹はり老枚戸ニ仕い而為致い事を差免しハ而者  
如何、

但し黒ぬり色付両開等致ス間敷事、

一昨年三ヶ村立會之土砂留メ御褒美貳拾貫文致下い様子、他

村を承りぬ故相たのしき尋ぬ処、何角相鎮メ置ぬ様子ニ被  
申ぬ、是茂御きかせなりと下されぬハ、御公儀様より被  
下ぬ物ゆへまたと難有存ぬ処ケ様之次第ニ、御公儀様之  
物さへ右躰ニ被致ぬ、是も御聞セ被下ぬハ、此後者尚ミ銘  
々無油断心得ぬと皆申ぬ、

三ヶ村を申ぬハ、此御褒美之儀ハ隣村ニも有之ぬ得者仲  
人ハ<sup>理</sup>利解申聞セ可申ぬ事、

一難渋仕ぬ而逼塞仕ぬ節、小屋・土蔵に這入ぬ節瓦ぶきニ而  
ぬ得者、苦ぶきニいたしぬ様被申ぬ、

三ヶ村を申ぬハ、是も栄耀ニハ致し不申、逼塞ニ而突ミ  
難渋ニハハ差免されぬ而ハ如何、

一村役人懸場芝居開帳参りつれ立船遊参栄耀ケ間敷事度ミ有  
之ぬ、ケ様之あしき事ハ一同見習やすく困入ぬ、入用何れ  
ぬ出ぬ哉、愚案ニハ疑ひ掛りぬ普請場は茂酒肴持参ぬ、此  
儀も如何ニ存ぬ、何れより入用も出ぬ哉、承度ぬ、

三ヶ村を申ぬハ、開帳参芝居之儀ハ仲人を精ミ理解申聞  
セぬ事、

一男頭儀ハ水取ニ限ぬ処、追ミ所ミ普請等ニ被遣ぬ難渋之者  
共ハ高持衆を<sup>被</sup>赦ひぬ様ニ存ぬ、御地頭様より帯刀御免之由  
銘々たつとミ居ぬ処、追ミ権勢ニつり我儘之取計有之

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

ぬ、帯刀身分ニハ不似合ニぬ、  
三ヶ村を申ぬハ、此儀ハ不及論ぬ事、

一中嶋并ニ川筋之立木、五拾年已前ハまだ、切致ぬ得者大  
小百姓夫相應ニ割附有之ぬ得共、近年ハ私共ハ賣払之節  
も入札不為我儘之致方ニも存ぬ、

三ヶ村を申ぬハ、中嶋并川筋立木惣賣拂ハ格別、まだ  
、切たりとも村方一同入札ニ被致ぬ而者如何、

一所之普請指人足之儀私共ニ限ぬ得共、ケ様之儀ハ村百姓一  
ツニぬ得共、我儘ニ取計ニ被致ぬ、

三ヶ村を申ぬハ御普請所指人足之儀、是迄普請ニ不出人  
ハ格別、其外人足ニ出ぬ人ハ三番之内ニ而茂村方一統方  
一統ニ而者如何、

一初納之儀高持衆ニ限りぬ様ニ承候得共、私共にも急度申渡  
され初納不仕ぬ得者被化ぬ、ケ様ニ勝手之事私共ぬ申付  
ぬ、

三ヶ村を申ぬハ、初納之儀ハ高持之内ニ而も、是迄藏納  
ニ致出ぬ人者村方三番之内たりとも、村方一統同様ニ取  
計ぬ而ハ如何、

一開牛馬養来ぬ処敷等多ク被致ぬニ付、只今ハ難養困入ぬ、

三ヶ村を申ひ荒地之場所牛馬養来ひ而も、川除のため御頭様を被仰付ひ事故無執事ニ御座ひ、

一五人組之儀古来者私共方ニ頭貳拾組有之、近年五ツ組ニ限られ、是新規之致し方ニひ、只古来を願ひ、

三ヶ村申ひ五人組之儀、只今五組之内若心得違仕ひ而被差替ひ而も同様、中間に被申付ひ様ニ定ひ而ハ如何、

一四

(中川主一郎氏所蔵)

(表紙)

一 文政五年十二月七日 年寄

導養寺一件取暖相調ひニ付 太郎兵衛

御公儀様に差上ひ済状連印写 扣

乍恐口上書

當村小百姓を村入用等之義ニ付、村役人に掛ひ出入一件御地頭所を御吟味被仰立、當御地頭ニ而御吟味ニ相成、其初両苗之内堂六人を導養寺頭之儀ニ付御地頭所に願書差出申ひ、然ル所小百姓傳右衛門を堂六人人掛ケ、導養寺ニ而相用ひ玉印之儀右六人之もの共方へ奪取ひ旨、尚又御地頭に願書差出、右ニ付導養寺一鉢之義并隨身之義も申争ひ一件之義とも出雲村五郎右衛門・池尻村庄屋宗兵衛・小口村庄屋新之丞ひ

取暖之儀、双方を相頼左之通熟談相調申ひ、

一 例年正月三日両苗方頭之節相用ひ玉印と唱申ひ玉印之儀者、元來傳右衛門家ニ持傳ひ義ニ有之ひ処、當正月三日傳右衛門父伊右衛門持參之節、堂六人を無鉢ニ奪取ひ旨傳右衛門を申立ひ、

一 両苗之内六人、其外者玉印之儀者元來堂六人を傳右衛門方へ預ケ置ひ義ニ而、去ル年正月三日頭之節伊右衛門申聞ひハ、玉印等風喰様ひ而ハ不宜ひ間、箱拵入置ひ様いたし度旨申上ひニ付、伊右衛門に對談之上堂六人之内八郎右衛門方へ右玉印請取帰ひ義之旨申立ひ、

此義双方共申口而已ニ而證據無之、依之暖人共段ニ双方承訖、以上右玉印ハ是迄傳右衛門預り来ひ儀と相聞ひニ付、其儘ニ而是迄通傳右衛門に預ケ置ひ而、毎年正月三日頭入用之節ハ前日傳右衛門持參いたし而頭ニ相用ひ所ニ拵置、三日頭相動是迄通り傳右衛門に預ケ置ひ事、

一 導養寺ニ而例年正月三日両苗方頭之節、神酒供米上ケ下ケ之儀傳右衛門仕来、尤同人上席いたし神酒供米共傳右衛門裁初夫を堂六人頭戴いたし仕来ニ而、尤慶長年中郷土中と認印形有之書付ニ上席ニ立相動可申旨之書付有之旨傳右衛門申立ひ、

一 両苗方ハ正月三日頭之節、両苗之内堂六人ハ相勤い而、則神酒供米之儀者傳右衛門ニ上ケ下ケ致させい得共、同人以上席いたし儀ハ勿論、神酒供米共傳右衛門裁初儀ハ無跡形も偽之由、尤慶長年中書付之儀も其比書留之趣ニ而者印形取持不仕儀、諸書付等ニ判形認有之印形ハ無之段申立い、

此義取暖人共ハ印形等之儀御地頭所へ承合い得共、當御知行所ニ相成いハ元禄年中之事ニ而、右已前之儀ハ何等之儀も難相分趣有之、何分年古キ儀ニ而右書付小百姓方ニ持傳等之儀も隨成儀ニいハハ、是迄双方共疑と規定も相立可有之筈之処、無之儀双方共申口不分明ニ有之、文化十三年閏八月両苗方へ傳右衛門ハ差入書付心底少茂無相違、然上ハ先規之通永ニ隨身可申と有之上者、傳右衛門上席可致儀共不相聞、堂六人上席ニ而頭相勤來い儀と相聞い旨を以、段ニ取扱堂六人上席仕來、傳右衛門座席之儀ハ北ノか已東ノ方は迄通り之事、

但導養寺ニ而神酒供米之儀、前ニハ傳右衛門上ケ下ケ是迄通り之事、

一 導養寺支配之義双方ハ申立い得共、両苗方ハ導養寺ニ付諸事入用帳面差出、前ニハ導養寺ニ付小番組共度ニ出入有之い訳申立、八拾人組之内ハ導養寺ニ付諸帳面等も無

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

之、両苗と小番組と往古出入之節ニも不相拘い得者、両苗方修覆仕來いと相聞い得者両苗方支配之事、

一 導養寺ニおゐて毎年正月九日八十人組酒盛之頭之儀、前ニハ相勤來い得者、其日両苗方へ相断鍵預ケ來い而是迄通り勤い事、

一 両苗方ハ八十人組之内、隨身之儀彼是申立い而相纏有之い得共、毎年正月導養寺ニ而相勤い酒盛之頭之儀も是迄通り調い上、文化十三年閏八月差入置い一札文面之趣相守隨身可致い、尤両苗方も自然不直之儀無之様相心得、且又八十人組も実急ニ相心得、双方各ニ穩ニ相治りい様可致の事、

但両苗方他家ハ養子いたし儀、八十人組之内ハ樽代遣し儀是迄通り之事、尤樽代受い以上悦ニ参り儀是迄通り之事

右導養寺一件并隨身之儀共取暖人共段ニ厚取暖いハハ、此度右之通双方熟談之上内濟相調、向後相各ニ実意を以前ニ仕來り通相守い筈、右ニ而各ニ聊何之申分無御座、右之通内濟相調い義ニ付、取暖人連印此段奉申上い、尤右之趣御地頭所へも申上い義ニ御座い、以上、

丹波桑田郡馬路村

文政五年午十二月七日 八十人組之内

惣代 傳右衛門

傳兵衛

市兵衛

和右衛門

太兵衛

伊之助

同村兩苗出入惣代

八郎右衛門

仲右衛門

庄屋 富右衛門

年寄 太郎兵衛

同郡出雲村

庄屋 五郎右衛門

同郡池尻村

庄屋 惣兵衛

同郡小口村

庄屋 新之丞

御奉行様

文政五年 但し前済状同断

但し貳度目落合い写

導養寺一件ニ付仲人取暖趣意

午ノ十月

庄屋 五郎右衛門  
庄屋 宗兵衛  
庄屋 新之丞

一 導養寺ニ而正月三日兩苗方頭之節、御酒御供米上ケ下ケ之儀傳右衛門仕来リ、尤傳右衛門致上席、御酒御供米共傳右衛門始頂戴仕、夫より兩苗六人頂戴仕様申之、彼是往古ノ慶長年中書付写貳通、其外書物等差出し事、

一 此儀兩苗方へ相尋儀、兩苗方ニ導養寺ニ付諸入用帳面・堂内勘定帳面、文化十三年子年八月八拾人組ニ差入一札之写差出し而、正月三日頭兩苗方六人相勤儀而、則御酒御供米之儀ハ傳右衛門ニ上ケ下ケ為致儀得共、致上席儀杯と申儀殊ニ御酒御供米共、傳右衛門始致頂戴儀無跡方も偽之由被申之儀事、

一 此訳双方ニ被指出儀書付を以て仲人相考儀ニハ、正月三日頭之儀兩苗方頭日、殊ニ文化十三年閏八月兩苗へ差出一札ニ傳右衛門印形仕居儀得共、兩苗方六人上席ニ而相勤仕来儀と相聞儀得共、兩苗方六人上席仕来之事、傳右衛門座席之儀ハ北ノカ已東ノ方是迄通之事、

但し導養寺而御酒御供米之儀前々ハ傳右衛門上ケ下ケ是迄通之事、



一 正月三日両苗方頭之節、相用い宝印と唱へ玉印之儀ハ、両苗方無鉢奪取い様傳右衛門申立い故仲人両苗方に相尋い処、両苗方被申いハ、鼠喰様しい故箱を捨入り様對談之上、八郎右衛門方預りい様被申い得共双方申い而已ニ而、仲人得と双方聞糺しい得共双方共何之証拠も無之い故、双方被申い事仲人難相用い故、是迄傳右衛門預り来りいと相聞い得共、其儘ニ而是迄通り傳右衛門に預り置い也、毎年正月三日頭入用之節ニ其前日傳右衛門持参いたしい而格置、三日頭相勤是迄通傳右衛門に預け置い事、

一 導養寺支配之義双方申立い得共、両苗方ハ導養寺ニ付諸事入用帳面被差出、前より導養寺ニ付小番組度出入有之い訳被申立、八拾人組之内ハ導養寺ニ付諸帳面等も無之、両苗と小番組と往古出入之節ニも不相拘い得者、仲人相考いニハ此訳両苗方修覆仕来いと相聞い得者両苗方支配之事、

一 導養寺ニおゐて正月九日八拾人組酒盛ニ頭之儀前ニ相勤来りい得共、其日両苗方へ相断鍵預け来い而、是迄通相勤い事、

一 両苗方へ八拾人組隨身之儀、彼是申立い而相鍵有之い得

共、毎年正月九日導養寺ニ而相勤い酒盛之頭も是迄通相調い上、文化十三年閏八月差入置い一札文面之趣相守隨身可被致い、尤両苗方も自然不直之儀無之様相心得、且又八拾人組も実意ヲ以相心得、双方相各ニ穩ニ相治りい様可被致い事、

但し両苗方他家より養子被致い節、八拾人組之内へ樽代遣しい儀是迄通之事、尤樽代受い上悦ニ参い義是迄通之事、

一五 (馬路町自治会所蔵)

(表紙) 両名家来筋相手ニ相成い者名前」

中川(巻)録左衛門  
家来筋之者  
虎右衛門(巻)

半兵衛  
〔附巻〕  
「虎右衛門・半兵衛義八家来筋之ニ御座い而、半兵衛義八年貢ニ差つまり家差出しいニ付、録左衛門買戻し無惜買ニ

出入  
富助  
〔附巻〕  
「富助義虎右衛門兄ニ而別家仕居い者ニ

御座い、」

資料

万助〔附箋〕「万助義家来筋之者ニ御座いへ共、九ヶ年以前暇遣し申い、」

人見團六

家来筋之者

又兵衛

同

小助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

本助

小助〔附箋〕「小助義ハ團六父團三郎代ニ暇遣し申い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

本助〔附箋〕「本助義小助同様ニ御座い、」

家来筋之者〔附箋〕「松元粹右近代ニ身上おとろへ申いニ付、十傳右衛門

傳六 二三ヶ年以前傳右衛門方ニ暇カ乞申い、

傳右衛門方ニ分家仕居い傳六義ハ累代恩義

義□い哉、一件相始りい迄出入仕罷在い、」

中川源五右衛門

家来筋之者

磯八

傳藏

中川紀同

家来筋之者

惣五郎

人見八左衛門

家来筋之者

喜代七

人見林右衛門

家来筋之者

庄助

中川要右衛門

家来筋之者

彦兵衛

人見松元跡

當時龜太郎

直七

文政五年午八月八日

庄屋

富右衛門

丹州桑田郡馬路村

富右衛門

富右衛門

富右衛門

年寄 太郎 兵衛  
堂六人之内

八郎 右衛門  
仲 右衛門

御奉行様

文政五年午八月八日

庄屋 富 右衛門  
年寄 太郎 兵衛

堂六人之内

八郎 右衛門  
仲 右衛門

御役人中様

覺

一牛玉

卷ッ

一牛玉丹入

老ッ

一家米筋之者私共相手取り名前書 一冊

右之通 御尋ニ付奉差上い、以上、

丹州桑田郡馬路村

文政五年午八月八日

庄屋 富 右衛門  
年寄 太郎 兵衛

堂六人之内

八郎 右衛門  
仲 右衛門

御奉行様

右之通 御役所へ奉差上いニ付、乍恐写書相認奉御高覽入  
い、以上、

丹州桑田郡馬路村

丹波国南桑田郡馬路村阿苗文書

(表紙)

「文政八年西四月廿七日上京

小もの一件日記

文政七年申十月の續

得

一 小もの共儀、追々新規我儘之儀共増長致しいニ付、不止事  
再應引合い処、兎角我意申立頓着いたし不申いニ付、不得  
止事及出訴ニ可申積リニて上京いたし申い事、  
但し此前段村方ニ而引合い續、文政七申十月記鑑ニ相認  
め有之、

一 富右衛門四月廿七日上京、勘六・太郎兵衛儀者翌廿八日上  
京いたしい事、

一四月廿九日 御地頭様右之趣富右衛門・太郎兵へ罷出御届申上<sub>レ</sub>ハ、青砥様御出役ニ而被仰渡<sub>レ</sub>ハ、委細ニ言上可仕旨被仰渡<sub>レ</sub>ニ付、左之通之儀共可奉申上<sub>レ</sub>ハ事、

一当春已来瓦葺之普請いたし  
申<sub>レ</sub>ハ者、  
藤治郎 勘吉  
誰々、九平

一同破風を仕懸ケ申<sub>レ</sub>ハ者、  
誰々  
一同普請手形・家役米ヲ不差出<sub>レ</sub>ハ者、  
誰々

一同竹簀戸取建<sub>レ</sub>ハもの、  
誰  
一定米不足取暖へ入用、

右之外長林寺法事之節不法いたし<sub>レ</sub>ハ義、町頭桑八・幸助相拒<sub>レ</sub>ハ義共逐一言上仕<sub>レ</sub>ハ處、御重役共御相談之上、左之通被仰渡<sub>レ</sub>ハ事、但し右名前者奥之願書之處ニ記ス、

一良刻青砥様被仰聞<sub>レ</sub>ハ者、右之通追々小もの共新規増長いたし<sub>レ</sub>ハ而者、村方相治リ申間敷<sub>レ</sub>ハ間、當時之處ニ而者、御役所表之□ねも離し不申<sub>レ</sub>ハ事故、御地頭ニ而御取締ハ相成間敷<sub>レ</sub>ハ得共、近々此方様へ相下<sub>レ</sub>リ<sub>レ</sub>ハ様ニ相成<sub>レ</sub>ハハ、急度取計いたし違可申<sub>レ</sub>ハ而被渡<sub>レ</sub>ニ付、有かだく御禮申上<sub>レ</sub>引取

申<sub>レ</sub>ハ事、

一同夜廿九五ツ時御地頭様被御使参<sub>レ</sub>リ<sub>レ</sub>ハニ付、折節富右衛門他行ニ付、太郎兵衛老人罷出<sub>レ</sub>ハ處、御三人様御立會ニて被仰渡<sub>レ</sub>ハハ、今日右様ニ申<sub>レ</sub>ハ得共、御公儀之身いつ相下<sub>レ</sub>リ<sub>レ</sub>ハも程知<sub>レ</sub>不申<sub>レ</sub>ハ得者、其内如何体之儀ヲ仕出し<sub>レ</sub>ハ哉も相知<sub>レ</sub>不申<sub>レ</sub>ハ事故、先々急々御役所へ御願可申出<sub>レ</sub>ハ旨被申渡<sub>レ</sub>ニ付、暫之内ニ御了簡相變<sub>レ</sub>ハ得共、致方無之儀ニ付、尚又宜御願可申上<sub>レ</sub>旨申引取<sub>レ</sub>ハ事、

一五月朔日前夜大雨ニて殊外大洪水ニ付、四条河原之茶店流<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>ハ趣、且又丹波杯も殊外大洪水之様子珍敷事ニ<sub>レ</sub>ハ、

一同日富右衛門・勘六・太郎兵衛・弥平太色々相談し<sub>レ</sub>ハ得共、兎も此上者御役所様へ御願申<sub>レ</sub>ハ外ニ勘弁無之儀ニ付、其趣村方へ通達之ため弥平太人足利助を供ニ召連上<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>ニ帰村いたし被申<sub>レ</sub>ハ事、

一同日三人相寄、右願書之下相認<sub>レ</sub>ハ申<sub>レ</sub>ハ事、  
(書籠之)

一五月二日八ツ時過<sub>レ</sub>ハ、八郎助上京喜平召連<sub>レ</sub>られ<sub>レ</sub>ハ事、  
晴天ニ相成ル  
右八郎助諸書付持参、村方ハ洪水ニ付河原尻・淵尻急々江川并井関損亡多有之<sub>レ</sub>ハ趣申参<sub>レ</sub>ハニ付、直様右之様子御地頭

様御届申上、淵尻普請急破之儀ニ付未目論見ハ不仕いへ共、被仰付被下い様御願申い処、御聞濟有之い付、村方へ申遣い事、

一五月三日筆工吉田を相頼、願書相認メ申い事、願書之写別番有之、

一右願書之ケ条左ニ記、

一人足手形家役ヲ相拒ミ不差出い者、

一新規ニ瓦葺普請いたしい者、

一同破風ヲ仕懸ケい者、

一同竹簀戸捲いもの、

一定米尻不足取暖人入用滞之事、

右之通之儀願書相認メい事、

一五月三日彦七郎上京、去ル朔日供水ニ付淵尻水未引不申、

并聞普請不出来ニ而田地植付殊之外延引相成い趣演話ニ付、右願出い儀時節悪クい付、植付後迄延引可致様ニ相

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

談取極メい事、

一五月四日右願出い儀延引ニ付、在京一同帰村之事、

一七

(馬路町自治会所蔵)

(表紙)

嘉永二年丑四月廿日

八拾人組之者共より今年引別れい九人之者共を相手取故障出入、終ニ者 御地頭所へ願書を以申出いニ付、依之御地頭所より右九人者共へ返答書を可差出旨被 仰付、右ニ付九人之者共奉差上い返答書之写

(表紙裏貼紙)

「右九人之者共より 御地頭所へ差上い返答書を付、役人共も及見い得共、其時折悪敷大切之用向に差掛リ居リ申い儀存写取不致、後ニ而九人之者共へ 御地頭所へ差上い返答書之下書これあらふ間、持参いたする様申聞い処、九人共之申ニ者對談ニ付、大ニ障取本紙相認い事延引い処、村方之返答書を早ニ可差出旨被仰下い儀故、取立相認本紙と下書と之續合も不仕差あけたてまつりい間、意ニおゐて相交い儀者聊無御座い得共、少之間違等も可有之哉、其程難計いニ付、此段御断申上ルと申差出い書付之写ニ而御座候、」

## 乍恐奉差上返答書

一 去ル嘉永三戌十一月十六日之夜、村方より助吉・太兵衛・喜代七・忠三郎・嘉七・新八・富之助・庄兵衛・佐太郎右拾人之もの可能出様御沙汰有之ハニ付、早速罷出候處、村方より被仰聞儀者近比ハ拾人組甚以不取締ニ由故、已後為取締其方共拾人へ組頭を申付候間、組内を小分いたし取締をいたす様、若シ亦組内之儀ニ付相願度義できハハ、右組頭之内より兩人宛可罷出様、且亦組子之内に不心得之ものできハハ、精々異見ヲ相加へ候而不相用候ハ、其旨村方へ可申出様、亦組頭之もの共におゐてハ猶更相心得可申、若シ心得違之義有之者、早々組頭を取上ケ組子之内の神妙成ものへ申付候間、其旨急度相心得組内取締出精可致様被仰聞儀ニ付、同月十八日之夜佐太郎方へ其時之世話方藤内・治兵衛、右兩人之もの共を相招き村方より被仰聞儀を及嘶合之処、右藤内・治兵衛兩人共致承知罷歸り候て、翌十九日治兵衛宅へ一統を打寄承知為致呉ハニ付、同月廿一日右組内小分ニいたし名前書ヲ村方へ差出候事ニ御座候間、右組頭之儀者拾人之家へ被仰付たる訳ニ而無之儀者、一統之もの共茂篤と承知いたし居申付得共、其後ニおゐて組子之もの共組頭之義彼是申掛、亦者村方へ罷出、右組頭之義者八拾人組へ被仰付候事歟、但シ拾人之家へ被他付候事歟と尋ニ出候趣ニ御座候得共、右組頭之儀拾人之もの共我家の格杯と申儀者一切無御座候、

一 翌嘉永四年亥の春より右組頭之もの共歟度々寄合、別々の致し方を致し候杯と申立候共、左様成義ハ決而無御座候、尤同年五月中比に一兩度寄合いたし候得共、此儀者組子之もの共へ相拘ル訳ニ而者無之、両苗の世話方衆より組頭之もの共組内取締出精いたす之趣、両苗一統之意ニ相叶候事故規模を致し遣シ度、右ニ付段々及相談居ル訳と御内々被仰下候事故、其儀ニ付一兩度者致寄合候得共、其余におゐて組子之もの共別々のいたし方をいたす候杯といわるゝ様の義決而無御座候、

一同月廿九日脇差々ゆるさるゝ義荒方取究り候趣、両苗世話方衆より承候ニ付、右拾人之内より富之助・嘉七兩人之もの治兵衛方へ参り其訳及相談候處、右治兵衛申儀者左様之儀ニハハ、一統之ものへ嘶いたそふと申呉ハニ付、右富之助・嘉七兩人共引取候事ニ御座候、此時右兩人之者々格者小番組と同格じやの、亦恐多御地頭様へ御出入之儀相叶候杯と申候事一切無御座候、

一同年六月朔日早朝に伊兵衛・宗兵衛組頭之内之太兵衛方へ参り、此度両苗より右拾人之もの脇差々ゆるされさしやる儀者如何之訳と相尋候ニ付、右又兵衛申儀者已後両苗衆吉凶之節、脇差をさし参り上りて口上ののへらるゝのと、

會所へ出ひ節蔵番迄脇さしをさしてゆかるゝのと、是等之儀を差ゆるさるゝ訳と申いへば、伊兵次申ひ義者右拾人之ものハ夫でよからうなれ共、一統之もの歟さゝれぬ様に相成と申立いへ付、夫より太兵衛兩苗の世話方衆の内へ参り其訳申入い處、右世話方被申いニ者、此度兩苗より右拾人之もの共へ脇差をさしゆるした迎外のものへ差障リニ者不相成ゆへ、左様の事を申もの有之いハ、世話方内へ参る様に可申、左いハ、得心之参ル様に申聞すると被仰下いニ付、直様太兵衛右伊兵次方へ参り右之次第ヲ申入い得、伊兵次申ひ義者此方共者何方へも様不参、此上者出ル所へ出而断を相分い間、左様に思ひ呉い様と申いニ付、無是非掃りい處、治兵衛呼込いニ付立寄い得、右治兵衛ハ伊兵次の返事者如何哉と相尋いニ付、太兵衛・伊兵次之申た通断いたしい處、右治兵衛も伊兵次と同様に申い事ゆへ其儘掃り申候、亦同日の八ツ時分に治兵衛・藤内拾人之内の忠三郎方へ参り、右脇差之免許ヲ請ル事暫相待呉い様と申出、其時書付其組内に拘敷不拘カと相尋い得共、拾人も其時ニ者右脇さしの免許不請、さきの儀故組内へ拘敷不拘カ其程者不知と申い得、一旦引取、暫すると右兩人亦参りいニ付、拾人之方より色々と断いたしいへば、左様の義ニいハ、勝手に請に行呉い様と申いニ付、右拾人之もの共兩苗世話方貞八殿方へ右脇さしの免許を請に参りい處、右免許状と請書の下書ヲ被遣い間、貰ひかへり得と見申い得共、

丹波国南桑田郡馬路村兩苗文書

一統之ものへ差支い様の義ニ而者無御座いニ付、直様其請書を相認差入可申い事ニ御座い、

一同月三日右組頭之内の喜代七方に拾人之もの共寄合いたし居申い處、其方へ治兵衛・藤内・傳八右三人之者共参り、此度兩苗方より差ゆるされたる脇さしの免許状を見せくれい様申いニ付、早速見せいへば、写掃り申候、

一同月四日伊兵次・治兵衛右兩人組頭之内の喜代七方へ参り、何れ右之書付ニ而者組内の邪（悪）に相成いニ付、元々取致し呉いハね者不相成由に申い間、其時拾人の方より申様者、此義者當月朔日八ツ時分に忠三郎方へ藤内・治兵衛右兩人参り、免許状勝手に請に参ル様申來置い而、今日に至り元々取致さねば、相ならむ杯と申の者無利と申もの、乍然拾人も篤と致相談あとより返事いたそうと申いへば、右兩人之もの引取申い事ニ御座い、

一同月八日一統之もの共嘉市方に致寄合居申い而、拾人之もの共に参い様申來いニ付、則拾人之内より松右衛門・庄兵衛・弥八・喜治郎・忠三郎・嘉七右六人之もの参りい而寄合之趣ヲ承りい處、伊兵次申様者免許状之向後ハ歟差支ルもの、亦者此免許状兩苗惣代之印形ゆへ左い而者兩苗之百姓と相成義、此方者 杉浦様の百姓と存ルゆへ、此免許ニ而者

承知いたしがたく旨申掛ひへば、大勢のもの共よりも同様に申掛ひニ付、其言訳を致しし得共、なか／＼もつて聞入呉不申の間、あとより返事におよぶよしに申置引取り事、

りひ処、治兵衛・伊兵次申様者拾人之衆者まづ今日より絶交申付ルと申ひニ付、兩人は、絶交請る訳者なきと申て帰りひ事ニ御座ひ、

一同月十一日之夜伊兵次方へ弥八・新八兩人参り、先日返事ニ参り申候、右書付の義殿組内の邪(魔)に相成ひはゞ如何様の六ツケ鋪義出来ひ共、拾人之ものより急度言わけいたし可申ひ、若シ言訳不相立ひはゞ、此方より組内之處者引故、夫迄之処しんぼういたし呉ひ様段々頼ひへ共、なか／＼もつて聞入呉不申、何分右書付を元々取いたする歟、さなく、バ組を休様八十人組者残りのもの歟、勤行程にて強く申立ひニ付詮方無之の間、一まづ退き篤と致相談あとより及返事由申置引取り事ニ御座ひ、

一同月十四日拾人之もの共助吉方に寄合いたし居申ひ処、其席へ伊兵次・伊兵衛・傳八・源四郎・藤内・治兵衛右六人之もの参りひニ付、色々に致相談ひ得共、何分右之書付を元々取いたする歟、それができずバ組を相休様拾人之ものも出精いたするならば、組を退て出精をいたせと段々申立、何分早き嘶し者組子に付歟不承知と申ひニ付、夫ならば拾人之ものゝ不及カ義故、其訳村方へ届ケ出ルと申ひへば、一統より茂村方へ願而申ひへ共、ケ様成ル義をかるゝ敷届ケ出ルも如何と存ひニ付、村方へ出ル所兩三日相待呉ル様と申ひへば、兩三日之事ならば相待よし申置、右六人之もの共引取り事ニ御座ひ、

一同月十二日朝の間に拾人之内より助吉・嘉七右兩人藤内方へ参り、昨日の嘶はたゞ口請合と儀故、左ひ而者承知茂難成哉に存ひ間、請書を差入ひニ付、夫ニて組内一統得心致しい様に及嘶合呉ひ様段々藤内を頼ひ得ば、右藤内其意ならば組内一同に嘶いたそうと申呉ひニ付、引取り事ニ而御座ひ、

一同月廿一日拾人之もの太兵衛方に致寄合居ひて、佐太郎一人一統のもの傳八方に致寄合居申ひ処へ参り段々致相談ひへ共、何分組子に附ひ儀者不承知のよし申ひニ付、左様申呉ひ而者逆茂拾人之ものゝ了簡ニ不参義故、其訳村方へ届出ねばならむ由申置引取、あとより善兵衛・元治郎右兩人参り、いよ／＼村方へ右之訳を届出べくひ間、為念申入ルと申置引取り事ニ御座ひ、

一同月十三日之夜一同之もの共龜助方に致寄合居申ひて、拾人之ものに参りひ様申来りひニ付、新八・富之助右兩人参

りひ事ニ御座ひ、



一同月廿二日拾人之内より新八・太兵衛右兩人村方へ右之趣届出<sup>理</sup>ぬ、其後村方より双方へ段々の御利解に預り、亦又方様の御利解にて同年九月に組頭已来年々廻役之為取替書ニ而一たん事済仕<sup>理</sup>得共、兎角組頭之意を不相用、剩我儘に組頭を相捨、村方より被仰付ぬ組頭を蔑にいたし、亦色々の義を申掛相具すべし故組頭難相勤、乍然無是非同年霜月十一日藤内方へ助吉・新八右兩人参り、組頭之儀者村方へ断ニ出<sup>理</sup>ぬ趣及相談之處、右藤内申様者、其義者先暫相付呉ル様と申<sup>理</sup>間致承知相帰<sup>理</sup>ぬ處、同日夕方に右藤内・新八方へ参り村方へ組頭断に出<sup>理</sup>ぬ儀勝手に行<sup>理</sup>呉<sup>理</sup>ぬ様申<sup>理</sup>ぬ付、夫より村方へ助吉・新八右兩人之もの組頭之義断に罷出<sup>理</sup>ぬ事、決<sup>理</sup>而我儘に断出<sup>理</sup>ぬ様之儀ニ而者無之、相談之上断に罷出<sup>理</sup>ぬ事ニ御座<sup>理</sup>ぬ、

一同年十二月廿九日拾人之内富之助老人者大勢の方へ附、残九人之内より助吉・新八右兩人之もの藤内方へ参り、組内之處相休度旨承知の返答いたし呉<sup>理</sup>ぬ付引<sup>理</sup>取<sup>理</sup>ぬ事ニ御座<sup>理</sup>ぬ、  
一翌嘉永七年閏二月五日藤内・治兵衛右兩人之もの共、九人の内の太兵衛方へ参り、去冬藤内方へ組内を相休旨申参りぬ事、此義ハ暫の休敷、但シ長休敷と相尋<sup>理</sup>ぬ付、老人ニ而者難致返答ぬ故九人之者篤と相談におよひ上、あとよ

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

り返答いたすべく旨申<sup>理</sup>ぬ得<sup>理</sup>べ、右兩人之もの相帰<sup>理</sup>ぬ事ニ御座<sup>理</sup>ぬ、

一同月六日大勢之もの共又吉方に致寄合居申<sup>理</sup>ぬ而、九人之ものに参<sup>理</sup>ル様申来<sup>理</sup>リぬ付、助吉・太兵衛・弥八・喜治郎右四人之もの参<sup>理</sup>ぬ處、藤内申様者、去冬十二月廿九日ニ申出<sup>理</sup>ぬ組内ヲ休<sup>理</sup>たひと申<sup>理</sup>ぬハ暫の休敷、たゞしなが休の事かと相尋<sup>理</sup>ぬ間、なが休いたし度儀と相答<sup>理</sup>ぬへ<sup>理</sup>ば、治兵衛申様者、其義ニハト先達て又方様之御取暖に預<sup>理</sup>り事済いたし罷在<sup>理</sup>ぬ、為取替書之儀者数百本有<sup>理</sup>ぬとも、反古同様之儀ゆへ又方様へ双方共預<sup>理</sup>クに引<sup>理</sup>取<sup>理</sup>ぬよからうと申<sup>理</sup>ぬ付、依<sup>理</sup>而九人之方々右為取替書を又方様方へ預<sup>理</sup>クに参<sup>理</sup>リぬ事ニ御座<sup>理</sup>ぬ、且其時一統より申<sup>理</sup>儀者九人之もの組内をなが休と有<sup>理</sup>之柄者、導養寺の酒盛并堂内之儀ハ如何心得居<sup>理</sup>ル事ぞと相尋<sup>理</sup>ぬ付、右四人よりの相答<sup>理</sup>ぬ儀者斯なが休をいたし度旨申出<sup>理</sup>ぬ上之儀ゆへ、導養寺酒盛之儀者勿論堂内等の義も其方ニ而可致取計致呉<sup>理</sup>ぬ様申<sup>理</sup>ぬ事ニ御座<sup>理</sup>ぬ、其参小堂并伊勢講都而持寄講之儀ニお<sup>理</sup>てハ脇をかけむ杯と申<sup>理</sup>候義者一切無御座<sup>理</sup>ぬ、且其付平二郎申様ハ八拾人組と九人之もの組内之事一所に相ならむ様に村方へ引<sup>理</sup>わかれ届をいたする間、九人之方より村方へ引<sup>理</sup>わかれ届に出<sup>理</sup>る様と申<sup>理</sup>ぬ間、右ニ付双方々村方へ其旨相届<sup>理</sup>いたした事ニ而御座<sup>理</sup>ぬ、

一同年十一月十一日九人之内の太兵衛方へ藤内・治兵衛右兩人参り、組内へ跡戻り致スル了簡者無之歟と相尋ひ間、一人ニ而者返答致かたくいゆへ、篤と相談之上あとより返答可致旨申ひ得者右同人之もの引取申候、其夜九人之もの共及相談ひへ共、跡戻り致そうと申もの無之い付、喜治郎・太兵へ・治兵衛参り跡戻りの了簡無之旨申込ひ得者、右治兵衛申様者、當春引わかれて組の付合者いたさ様(二脱)とも跡戻りの了簡もあらうかとの計外之の儀ニおゐて者、前同様不相交附合居ひ得共、どうでも跡戻りの了簡なひ事ならバ、此上におゐて組内の義ハ不及申、仮令親類縁者たりとも一切不付合をいたする間、其旨相心得ル様に申ひ付余りの申方と存ひ得共、左様に申呉ル事ならバ、是非なき次第と申引取り事ニ御座い、

一伊勢講・小堂都而持寄講之有ものハ、銘々増稼いたし積立ひもの尤是迄勝手ニ付、度々相分ル義茂有之ひ事に御座い間、銘々講々分呉ひ様致引合ひ得共、大勢之もの共申合下ニ而者分又杯と申分呉不申候、

前文之趣に御座い間、組内ハ跡戻り迎者存不仕い付、何卒御憐愍を以右伊勢講・小堂都而持寄講之儀分呉ひ、御慈悲を以被為、仰付被下いハ、冥加至極一同難有仕合可奉存い、以上、

嘉永六年丑四月廿日

丹波桑田郡

馬路村

九人惣代

年寄	定	治
庄屋	新	一
佐	八	郎
弥	兵	衛
太	八	

御役人中様

一八

(馬路町自治会所蔵)

(表紙)

「嘉永六年

八十人組と九人之者と差違之儀ニ付

御上様へ奉差上り願書之写

丑四月十六日

乍恐奉願申上口上書

一嘉永三戌ノ冬村方が私共組内猶治り之ため拾人之組頭被仰付い處、拾人之者共が申義ハ我家之格ニ相成由申ひニ付、一同が申義ハ今新ニ組頭・組下と相定ル事を歎キ、又村方

の尋ニ参ひ處、村方ノ者家之格ニハ無之、組内治り役申付置い得者、其意ニ而相治りい様申付置い得ハ、心得違之者有之い節ハ村方ノ急度差替ルと被申いニ付相治りい處、

一嘉永四亥ノ春ヲ拾人之者共、度ニ寄合何か別之致方仕い而、五月廿九日十人之内ニ而富之助・嘉七兩人治兵衛宅ニ参り、此度両苗方ヲ拾人之者ハ脇差被下、格ハ小番組ト同様ニ相成、御地頭様ハ御出入之義モ相叶い趣未曉ト相定いニ而ハ無之い得者、先何分まし定い間内分ニ而申入ル由申い、六月朔日貞八殿宅ニ而、右之脇差御請申金子三拾兩請書共差出シい様申いニ付、其請書見せくれい様申い得者、組内ハ抱訳一切無之、拾人之者ニ相限ル書付ニい様申相見せ不申、其故差縫ニ相成いニ付、又村方ハ願出い處、何分熟談可致様達而御利解被下いニ付、又拾人之及對談い處、一向取合不申不得止事、御地頭様ハ奉願上ヲ致方無之い處、又方様ヲ双方御被召御聞札之上組内之組頭ニい得者、追々廻役ニ致し高下差別無之処ニ而、熟談いたしい様御利解被下いニ付、其意ニ任及對談ニい處、漸々拾人も得心仕、双方寄合熟談之上来ル子春ヲ十之内毎年五人ツツ順々ニ相替、何事も相談之上平等ニ致し、むつ間敷組相續可致様義定之取替セを以相治り、村方ハ願下ケ申い而相治り案心仕い處、其後九人之者共ハ村方ハ組頭之義も私ニ断、組内も休い而、何ニよらず組之有物ニハ一切相懸ケ不

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

申ト申置い而、其後伊勢講割ヲくれ、又ハ組之者ニも懸り有之杯といろく申立い得共、一同ヲ申義者我儘ニハ不分ト申置い、何分我儘義者計申、組を休い何之無孝者を両苗之内世話方ヲ引立被成下い而者、自然九人ヲ見ならひ、追々組を破りい者出来い而者、八十人組之相續難相成、此度一同歎ケ敷存い、何卒右両苗御世話方思召之処、八十人組ヲ御引立被下いハ一同案心仕い、別之御取計被成下い而者、難相治りいニ付不願恐御願申上い、格別之御憐愍を以右九人之者立戻り、前之通り八十組相續いたしい様御利解被為 仰付被下いハ、何如計冥加至極難有仕合可奉存い、以上、

嘉永六丑四月十六日

丹波桑田郡馬路村

八十人組惣代

伊 兵 衛 ○  
友 右 衛 門 ○

付添

庄屋 佐 六 郎 ○  
年寄 定 治 ○

御役人中様

右之通願出い、埒明事ニいハ、了済滞儀有之者 返答書致し、来ル廿一日双方罷出可對決、於不参可為越度もの也、  
丑四月十六日 此所ニ

二四九

上御役人御三人様

御名前御印

右九人之者共

庄屋

年寄 かつへ

右者本人可罷出、

年寄 頭百姓

一九

(人見惣一氏所蔵)

(表紙) 元治元年甲子十二月中

東御奉行小栗下総守殿

於御役所ニ御尋差續返答

手續書

人見弥九郎、記之

子十二月十三日、東御奉行小栗下総守殿御役所へ馬路村庄屋・年寄・頭百姓、明後十五日罷出の旨之御差紙左ニ尋儀有之ニ付、明後十五日四ツ時東御奉行所へ可罷出、若於不参者可為曲事者也、

子十二月十三日

京都番所印

丹波桑田郡馬路村

庄屋

同十四日、庄屋共着致十五日庄屋貞八御役所へ罷出掛り与力田中寛次郎を被申聞、帯刀百姓共多人数上京致居、右人数書差出の旨被仰付庄屋申、ハ、村用之儀ニ有之得、私共を取調差上得共、阿苗郷士ニ相抱り儀、惣代に被仰付の様申上得共、掛り役人聞入無之、御役所之申付とて西洞院下立賣上ル法林寺へ参り、右旅宿ノ人数書請取持参可致様達而御申付、依而右寺へ参り中川種次郎に申入、同人申ハ、郷士共連名書庄屋へ相渡ス管ニ無之、御尋之儀有之得、拙者ども御呼出し被下度旨御掛りへ断儀申、ニ付、十六日庄屋共々右之段御役所へ相断申事、

同十七日、庄屋・年寄共の内三人罷出の様御達しニ付罷出の所、明後十九日左の五人之者召連罷出の様御差紙左ニ尋儀有之間、明後十九日五ツ時東御奉行所へ急度罷出、若於不参者可為曲事者也、

子十二月十七日

京都番所印

丹州桑田郡馬路村

定次 貞三郎

勝次  
武造  
佐太郎

右之者何れ茂本人ニ附添へ差添可罷出事、

右村

庄屋  
年寄

かたへ

其節庄屋武助が申上ひハ、両苗之者共儀、私共取扱可致答  
ニ無之、依而御證不仕旨押而申上ひ處、種々御利解之上、一橋  
様之儀を彼是被申外役所おゐて御用有之儀共、當御奉行所ニ  
而ハ取用不申右百姓とも彼是申ひ得者可召捕旨被申付ひニ  
付、左様ニひ得者先御召状御預り申上、両苗之者共へ示談之  
上御返答可申上旨ニ而引取申ひ事、尤相談之上十八日庄屋年  
寄に相渡ひ返答書左ニ、

覚

一御所可代板倉周防守様は御願被成ひ所、御調として此度五  
味金右衛門尉様就御下向當村神事能被仰付ひ、然者侍百姓  
衆いかかうしの出入御座ひニ付、則双方、金右衛門尉様御  
前ニ而被仰付ひ様子百姓衆いかかうしを取見物可仕ひ、不  
然ニひ、見物も仕間敷出入之儀者重而御吟味可被成旨ニ而  
能御座ひ所、兩人罷出暖可申ひ事、

丹波国南桑田郡馬路村両苗文書

一(尾) かい 高サ 九寸

一前之質 高サ いより五寸

一地形ハ 如前ニ

右三ヶ条之通唯今相究能御座ひ、其後ひ人などのかきとて古  
記かうしを被つけひよし承ひ間、則彼方へたつね申ひへ共何  
時も神事前ニハ取可申旨堅相定ひ条、自然相違ひ儀ニハハ  
何時も兩人罷出可申上ひ、以上、

馬淵九郎右衛門  
北村多兵衛

寛永元年十月十八日

人見 御侍衆中  
中川 参

一五味金右衛門尉様御下向ニ付芝間御見分之上開發被仰付  
ひ、御許状之写左ニ、  
丹州桑田郡馬路村・小川村・千原村之内八人講田中嶋荒廢  
之地可開發之由無相違ひ、御年貢之儀者、從當年隨田地之  
堪否可相納公役之儀五ヶ年令免除畢、若於不式済者彼田地  
可附同百姓者也、仍如件、

寛永貳年二月二日 金右衛門 御判

馬路村

久 兵 衛

太 郎 兵 衛

治 郎 左 衛 門

彦 之 丞

加 兵 衛

傳 助

五味金右衛門様

人見彦之丞  
中川加兵衛  
人見傳助

定

新田御請狀之事

一丹州桑田郡馬路村・小川村・千原村之内、八人講中嶋万年芝  
なこし新田之儀無相違被仰付忝奉存い、御年貢之儀當年者  
壹ツ五分來年者貳ツ取ニ御請申シ、來ル卯年ヨリハ立毛隨  
相應ニ被仰付可被下い、御公儀御役錢之儀當年ヨリ五ヶ年  
被成御免除忝奉存い、五ヶ年過い者急度御役錢可仕い、右  
年貢御役錢以下於御無沙汰仕者、右之田地被召上自余之百  
姓ニ被仰付いとも御銀ニ存間敷い、為後日一札仕上申い、  
仍如件、

馬路村

寛永貳年二月二日

人見久兵衛

人見太郎兵衛

中川治郎左衛門

萬治三年子三月十三日 備前

丹波馬路村

御印

人見  
中川

一馬路村神事能在之時、百姓共致見物い小屋之床隔子仕い義  
ニ付而、寛永元年十月人見・中川之者致訴訟百姓共と公事  
仕い處、日置村九郎右衛門・中村多兵衛暖い而床高サ九寸  
前之貫高サ床の五寸地形者如前と證文仕相渡い由い、  
然着百姓共去亥年八月神事以前右小屋之床を高く仕新儀ニ  
幕を可張用意致我儘を企い由、人見・中川之者訴訟申ニ付  
今度双方召寄相尋い處、百姓共右暖之證文を致違背床を高  
ク仕并新儀ニ幕を可張用意仕い儀無紛相聞曲事ニい、自今  
已後背此書附之旨於我儘仕者可處罪科者也、

覺

一此戴許書之以面御取用之次第左、

一一橋殿於御用談所取次川村惠十郎殿夫ヨリ中納言殿に御申上御披露ニ相成、郷士ニ紛無之趣郷土物代に於御用談所御連在之此事、

一御老中稻葉民部太輔殿公用人伊沢右馬允殿・田崎雄策殿に茂右同断之事、

一御所司代公用人小寺新五左衛門殿ニも右同断之事、

一東本願寺於御門跡而茂右同断之事、右之通ニ在之の間夫と郷士御取用ニ相成此事、

一御奉行五味備前殿を被下置い郷士人見・中川氏儀 御公儀之御書反古ニ相成此事、此段御返答承度存罷在い、以上、

馬路郷士

十二月

人見

中川

ヶ条返答覺

一馬路村之儀、御代官小堀仁右衛門殿を元禄十一五月中杉浦内蔵允殿へ御引渡之節、取納之儀者百姓ニ而御引渡ニ相成此事も難斗、両苗之儀者元々郷土既ニ万治三年御奉行五味備前守殿を茂御戴許書ニ人見・中川と御認ニ而被下置、元禄之後享保度江戸表於御評説所被仰渡い廉も在之、且両苗郷土御調之儀者右年中寛政度・天保度御改革之度毎願御調左いへ者、取納御引渡ト郷土之廉者別々之事之様ニ相心得居申此事、

一右ニ付取納之儀者、御代官小堀仁右衛門殿御支配ニ而御取扱ニ相成此事と存罷在此事、

一郷士之儀者、寛永年中百姓共ト差違出来いニ付、御所司代板倉周防守殿に致出願 御奉行五味備前守殿御捌ニ而被仰渡い、依之前文之通御改革度ニ御改有之申上来り此事、

一右之次第ニ付取納并村用之儀ニ有之い得者、地頭を彼是申立儀も尤ニ存罷在此事、

一郷士身分を彼是申立い者地頭心得違之様ニ存罷在此事、

月 日

一馬路村之儀者両苗高ニ在之、小百姓共へ為作夫を取立両苗を収納致来りし事、

一郷士身分ニ付田地向家頼之者ニ支配為致来りし所、取立嚴敷追々難渋仕家来任ニも難相成、依之私共作内々田地向取扱致罷在し事、

一地頭を帯刀之儀者延享年中人見圍右衛門より申し者、御地頭家来無敷勤番被申付い哉も難斗、然時者郷士帯刀ニ而ハ差支い儀故、地頭帯刀被相免い様出願可致旨相談致いニ付、一統可然ト致承知右廉ニ而御座し事、

一其後一統相談ニ者元を帯刀之身分ニ得者、地頭帯刀不承知之旨申立い者多、依而難渋と申立地頭帯刀相断申し事、

一文政度地頭を帯刀之儀彼是故障被申、依而又も出願いたしし事、

一地頭之勝手ニ付而者帯刀ニ而呼出し、又者土百姓ニて呼出し、自儘之取斗被致いニ付一統寄腹不致し事、

一右證據儘有之當夏以来より一橋様を參殿仕い節も郷士ニ付其御取扱被成下し所、九月晦日地頭役人を両苗之内五人苗字を削り土百姓同様ニ呼出し一橋様を度々罷出工致い扱申立、揚屋入并入牢申付し事又い、今般前々之廉を立戻り十月廿三日苗字を削り五人之者呼出し仕、依之一同及混雜多人数上京仕し事、

一当節ニ至り地頭を帯刀差免い者扱ト被申立い者不得其意ヲ、弥以地頭を差免い帯刀ニ御座いハハ、尚更其取扱ニ被致い筈と相心得し事、

一地頭を此度両苗之者郷士立度旨とて四拾人之徒党致い杯ト申立不埒之事ニ御座い、元来両苗之者共儀由緒書も入御覽い通、往古を將軍家御代ニ御加勢仕い先例も有之、當時之御時節世上不穩いニ付、身不肖之私共儀ニ御座い得共、猶身命御公儀様に御加勢仕度旨夫々内願仕い、為規定連判取之し事、

何分地頭之申立者自儘之様ニ存い間、此段御賢察奉願上し、

郷士惣代

十二月

人見軍治

中川種次郎

右之通差上い所掛り手力同心立腹致答書写取被差戻いニ付、庄屋武助を申上い者、返答書ニも有之い通地頭取扱方



不宣、依而差縫出来致い段押而申上い處御掛り聞入不申、  
尚文政三辰年中公事出入等ニ付諸役所へ罷出い時ハ、百姓  
ニ而可罷出旨書附地頭へ差出し有之、依之召連出い様大音  
ニ而敷敷被申付い間其儘引取相談いたしい事、

一十九日庄屋年寄共へ相渡い返答書左ニ、

御返答

一昨十八日庄屋共へ御利解之趣、左ニ地頭ハ文政三辰年中両  
苗先祖共ハ公事出入願筋等ニ付、御奉行所并地頭役所へ罷  
出い砌者、帶刀致間敷旨之御請差上い由、右之趣を地頭ハ  
御奉行所へ申立い由、此儀を以此度無苗字五人之者御呼出  
之旨庄屋共へ被仰付い趣、尤先祖共苗字を削りい御請者不  
仕いと存罷在い、右之段を彼是御調有之いハハ、其後天保  
十四年中御改革之砌、御公儀ハ五味備前守殿御書印御改ニ  
相成い者、両苗郷土又ニ相改りい事と存罷在い、其後地頭  
邊へ以前之通不行届之願書差出しい覺無之、右之趣を以御  
調奉願上い、以上、

十二月

郷土

人見

中川

右之通差上置い而、地頭取扱方之儀種ニ申上い處掛り尋有  
之い者、

一宗門帳ニ苗字無之趣、

一天保十四卯年中川治郎左衛門ハ繼目致何故い哉、亦天保度  
御改之節、御公儀ハ帶刀御免之御書下ケ有之哉之旨御尋、  
庄屋・年寄共返答ニ困入い事、就而者又ニ御利解者地頭ハ差  
免い帶刀百姓ニ相違無之趣、然レ者地頭を差越諸々へ罷出  
い者、不埒之旨種々被申聞返答無之おめてハ早ニ召連罷出  
い様、此旨一統之者へ申聞いと之事に付、引取申付て又ニ一  
統相談いたし、廿日出之儀者其儘拾置可申様取極メい事、

一廿一日之返答書者、一昨十九日庄屋・年寄共へ御尋之趣一  
ニ申聞之返答書左ニ、

口上覺

當十九日庄屋共へ御尋之趣一ニ承り御尤之事ニ御座い、連  
名之者共此儀ニ而、御奉行所へ出兼旨以書附ヲ差出い様被  
仰付、右御尋之趣御返答申上い、

一 地頭が由緒を調出し取立ニ相成ひ者、地頭郷士ト存罷在ひ事、

一 御公儀が由緒御調ニ而御取立ニ相成ひ者、天下之郷士相心得居ひ事作恐申上ひ迄も無之、馬路村杉浦内蔵允殿知行所ニ拝領被致、然ル所両苗之者共自儘ニ取扱被致ひニ付差違出来、享保度於御評説所被仰渡ひ廉ニ杉浦家ニ者承知之事ニ御座ひ、右等之儀此度於御奉行所而も御承知之事ニ而御調ト一統難有相心得居ひ、此上地頭邊か申立之儀御取上無之様奉願上度何分両苗之者共歎ケ敷存罷在ひ、今般地頭申立ニ依而苗字を削り 御奉行所へ可罷出旨御沙汰達而被仰付ひ得共、無余儀事ニ得共、左様ニ相成ひ而者享保度御調ニ立戻り歎ケ鋪奉存ひ、

一 宗門御尋、此儀丹波国馬路村長林寺茂御呼出し御尋被成下度い事、

一 天保度五味備前守殿御書印御改之節、苗字帯刀御免之書有之哉之旨御尋書附無之い事、乍去右年中被仰出ひ者享保・寛政度之例を以て御改革と被仰出、此儀如何之儀ニ御座ひ哉相分り不申い事、

一 繼目御尋此儀御答メ可申請い之事、御公儀が苗字帯刀被下

置ひを地頭自儘ニ取上ル杯ト認メ有之い書類儘有之、此儀如何ニ相成行ひ哉相分り不申い事、外ニ私之了簡を以て或ハ揚屋入、又ハ入牢申附ひ儀儘有之一切相分り不申い事、

一言上申上ひ者恐入ひ得共 御老中松平伊豆守殿御勤役中何某申ひ者、知恵伊頭守殿と承りひ間、御前ニ而言上相願ひ所御聞濟相成、伊豆守殿へ申上ひ者、「聞すともここを瀬とせん郭公木の下くらぎ杉のむらたち」 西行法師之歎言上いたしひハハ、伊豆守殿尤ニ被思召御調御止り、夫ニ御戴許被仰付事済ニ相成ひ趣承り及ひ、何分両苗郷士種々之次第も有之、奉對 御公儀の土百姓ニ而者罷出兼ひ間、此段乍恐奉願上ひ、以上、

十二月

馬路郷士

人見

中川

一 長林寺一札左ニ、

一 札覺

一 宗旨之儀者當宗門往古か人見・中川宗門帳ニ認メ来りひ所、至御當代中古右苗字附ニ而者地頭邊差支之趣被相願ひニ付、無錢儀苗字を削りひ段、奉對公儀の恐入ひ次第、尤

も此儀者先ミ代より申傳ニ相成居い、右之次第者若御公儀  
御調も有之いハハ、拙僧罷出申傳之趣委敷言上仕い間、  
此段阿苗御一統御承知置可被下い、以上、

月日

長林寺判

郷士 人見  
中川 衆中

右之書へ先達而申差上い書類不殘阿苗由緒書共相添、庄屋・  
年寄共へ一ミ申含メ、今日之返答書者不殘小栗下総守殿御手  
元へ差上可被下旨押而申上い、若与力同心衆彼是被申い得  
者、兼而召捕との事ニ付阿苗郷土上京之者六拾余人御奉行所  
へ召捕連に罷出い、尤出掛ニ杉浦殿役人宿へ立寄、元來家老  
始地役人共阿苗之郷土自儘ニ取斗、其上當御時節聊も不憚  
御公儀之不當而已申上、彼是御手数掛ケい段不得其意い  
間、役人共ニ始末柄を為認メ地役人共召連罷出い旨一統決心  
致い間、御奉行所之返答承り呉い旨申聞差出い事、  
右之次第を一ミ庄屋共い掛り役人衆へ申上い由、於御奉行所  
ニ書類不殘御取上ケ之上御掛りい被申渡い者、阿苗由緒を以  
て天下一之忠節尤之事、外国者存怒事日本ニおめてハ其儀彼  
是申者是有間敷、此度之儀ハ江戸表い取調申来りいニ付及吟  
味ニい、右杉浦役人共願出い儀ニ無之故、役人宿へ行事ハ相  
止い様御利解、就而者先達而差出い召状日限も相過いニ付、  
差戻しいと被仰付庄屋共御召状返納致い而、就而ハ庄屋一統

丹波国南桑田郡馬路村阿苗文書

之者共備國可致旨被仰付引取申い事、其節掛り与力衆御頼ニ  
其書付之内 一橋様始外方之趣意之下札御頼ニ付認メ差上い  
事、享保度於御評詮所ニ被仰渡い廉ニ書附ニ致呉い様御頼、  
此儀者、

覺

一享保年中於御評詮所ニ御戴許之旨郷土之中ニ者控書儘有之  
得共、此儀ハ地頭委敷承知いたし居い管ニ依而、地頭い  
御聞取奉願上い、以上、

郷士 人見  
中川

右下札之儀者廿二日ニ差上い事、其後者何事も御尋無御座  
小、以上、

尚冬ハ先相濟、

二〇

(人見惣一氏所藏)

(表紙)

「元治元甲子年十二月

杉浦より口上書

付り

郷土い御門跡い差上い返答書

御門跡い御返答」

口上覺

向寒之御益御門主様益御機嫌先被成御座珍重之至ニ忝奉存  
ハ、將又牧家郎知行所、丹波國桑田郡馬路村高持百姓共之内十  
人余、延享年中地方家来人見團右衛門ト申者依願村取締、且  
非道之節為夫役苗字帶刀差許、人見・中川相名乘罷在ハ、

其後難渋ニ付帶刀相止度段断申出廢刀之者茂有之ハ、猶又  
文政年中依再願、右両苗仲ケ間一同帶刀差許規定書申渡し請  
證取之、其後代替リ之節ニ繼目願出聞届之上差許、其時ニ定  
之趣申渡し請書取有之者之内四十人余申合セ郷士相立度目論  
見仕、手引之者有多人数上京其御殿にも願立仕品ニ寄御引立

ニモ可相成哉ニ被承及ハ、右者地頭有之者共ニ件決而御採用  
者無之御儀トハ、被奉存ハ得共、萬一御取上ケも有之ハ而ハ種  
々差支之儀出来自然不及止事、御稱号ヲも可差出運ヒ可至も  
難測、然ル節者深ク恐入ハ事ニ被奉存ハ、殊更丹波表之儀領  
主地頭ハ差許シ、帶刀之人別而多分有之ハ得者、牧家郎知行  
所内之者、右願意若も相立ハ節者乍テ外郡村にも差響キ、遂  
々一国之惑乱ト可相成も難斗、左ハ而ハ御時節柄奉對公邊恐  
入ハ次第基心配仕居ハ趣、且又往古郷侍之筋目有之坏ト申唱  
ハ、共、元禄度不残平百姓ニテ御代官小堀仁右衛門殿ハ御引

渡ニ相成ハ、爾来今以宗門人別帳も苗字認不申ハ、若目儘ニ  
古来之筋目為申立ハ而ハ、侍筋之者も諸国ニ難算盡儀ニ有之

ハ、殊今般不容易御時勢御固場其外不時用意地頭所ニおいて  
專勤弁有之事ニ御座ハ得者、右帶刀之者如何様之願筋仕ハト  
も御取上ケ被下聞敷ハ、此段宜敷御取圖御門主様ハ被仰上被  
下度御願、可得其意旨江戸表牧家郎ハ申越ハ間如斯ニ御座  
ハ、可然御披露可被下ハ、以上、

十二月四日

杉浦牧家郎使者

小島本之允

右之通東本願寺御殿ハ願出ハニ付、則御殿ハ意御座ハニ付御  
返答申上ハ、左ハ、

ケ条返答覺

一馬路村之儀御代官小堀仁右衛門殿ハ元禄十一五月中杉浦内  
藏允殿へ御引渡之節、收納之儀者百姓ニ而御引渡ニ相成ハ  
哉も難斗、両苗之儀者元ハ郷士既ニ万治年中御奉行五味備  
前守殿ハも御戴許書人見・中川ハ御認メニ而被下置、元禄  
之渡・享保度江戸表於御評定所被仰渡ハ廉も有之ハ、且両  
苗郷士御調之儀者右年中寛政度・天保度御改革之度毎預御  
調ニ左ハ得者、收納御引渡而郷士之廉者別々之事之様ニ相  
心得居申ハ事、

一右ニ付收納之儀者、御代官小堀仁右衛門殿御支配ニ而、御

取扱ニ相成い事ト存罷在い事、

一 郷土之儀者寛永年中百姓共ト差鍾出来いニ付、御所司代板倉周防守殿い出願致し、御奉行五味備前守殿御捌ニ而被仰渡い、依之前文之通御改革度、御改有之申上来い事、

一 右之次第ニ付収納并村用之儀ニ有之い得者、地頭い彼是申立い儀も尤ニ存罷在い事、

一 郷土身分を彼是申立い者、地頭心得違之様ニ存罷在い事、

月 日

一 馬路村之儀者阿苗高ニ在之、小百姓共ニ為作夫い取立、阿苗い収納致来い事、

一 郷土身分ニ付田地向家来之者ニ支配為致来い處、取立殿敷追い難波仕家来任ニ難相成、依之私共乍内ニ田地向取扱致し罷在い事、

一 地頭い帯刀之儀者延享年中人見團右衛門い申い者、御地頭家来無数勤番被申付い哉も難斗、然ル時者、郷土帯刀ニ而者差支い儀故、地頭帯刀被相免い様可致出願旨致相談いニ付、一統可然ト承知いたし右廉ニ而御座い事、

丹波国南桑田郡馬路村阿苗文書

一 其後一統相談ニ者元い帯刀之身分ニ得者、地頭帯刀不承知之旨申立いもの多、依テ難波ト申立、地頭ト帯刀相断申い事、

一 文政度地頭い帯刀彼是故障被申依而、又い致出願い事、

一 地頭之勝手ニ附而者帯刀ニ而呼出し、又者土百姓ニ而呼出し自儘之取斗被致いニ付、一統帰伏不致い事、

一 右證據儘有付當夏以来い一橋様い參殿任い節も郷土ニ付其御取扱被成下い處、九月晦日地頭役人より阿苗之内五人苗字を削り土百姓同様ニ呼出し、一橋様い度々罷出工ミ杯致い而申立揚り屋入并入牢申付事又い、今般前い之廉い立戻り十月廿三日苗字ヲ削り五人共呼出し仕、依之一統及混雜ニ多人数上京仕い事、

一 當節ニ至り地頭い帯刀差許い杯ト被申立い者、不得其意亦以地頭い差免い、帯刀ニ御座いハハ猶更其取扱ニ被致い管ト相心得い事、

一 地頭い此度阿苗之者郷土相立度旨とて、四拾人余徒黨致い杯ト申立不持い之事ニ御座い、元来阿苗之者共儀由緒書も入

御覽ニハ通、往古ハ 將軍家御代ニ御加勢仕ハ先例モ在之、當時之御時節世上不穩ハニ付、身不肖之私共儀ニ御座ハ得共、抛身命御公儀様ハ御加勢仕度旨夫ニ内願仕ハ、尤モ為規定連判取之ハ事、何分地頭之申立者自儘之様ニ存ハ間、此段御賢察奉願上ハ、

郷土惣代

十二月

人見軍治

中川種次郎

口上覺

過日ハ御書取御申入有之ハ、其御知行所丹州桑田郡馬路村郷士人見・中川両苗之者、先頃米致上京願意有之趣、則當山ハも願立仕ハニ付、右者前々ヨリ於其御方入組之次第も御座ハニ付、何等願出ハ共決而取用無之様被成度旨委面御書取之趣承知被致ハ、就夫ニ右両苗之者願品も有之ハ得共、於當山強而被成御取合ハ訳柄ニも無之、乍去右両苗之者往古ハ當山ハ由緒も御座ハハ、年曆相隔ハニ付自然等閑ニ成行ハ段敷ケ敷存ハニ付、此度旧例ニ復シ當山ハ立入之儀願出ハニ付、及取調ハ處相違も無之次第、殊ニ當山家来共之内右両苗之内ハ重縁之者も数多御座ハ、旁願意之通立入被差免ハ段、過日内意被

申渡ハ事ニ御座ハ、尤も其家之儀者旧来當山御宗門之儀ニ而格別之御由緒御座ハ御事ニハ得者、御知行所御差支ニ相成ハ儀被取扱ハ訳柄も無御座、往古之ハ由緒ヲ立入被申付ハ次第ニ御座ハ間、此段宣敷被預御承知度ハ、以上、

本願寺御門跡御使

十二月十二日

松岡丈内

一一一

(人見芳夫氏所蔵)

奉差上御請書

一 今般御一新ニ付村方治リ之儀被思召、御附屬之札共組内為取締、其身一代苗字義御免冥加至極難有仕合奉存ハ、然ル上者敬上を何更ニヨラズ御制禁之儀者堅相守、御為筋之儀ハ勿論本日身持不行跡無之様第一ニ相慎ミ、奢ケ間敷儀決テ不仕、子ニ孫ニ至ル迄毛頭為相届申間敷農業出精可仕、若心得違仕ハハ、苗字御上ケ如何様之御処置被仰付共、一言之申分無御座ハ、

一 御法度之強訴徒黨仕、連印尋取集惡更企ハ者有之ハハ、早速注進可仕、都而御用有之ハ節ハ早ニ駈仕精勤可仕ハ、

一 他村并村内出會之砌、我雜ケ間敷儀決而仕間敷ハ、



